再撰

花洛名勝圖會

東山之部

四

イ13
528
4

門 1 13
528
巻 4

紫雲山金戒光明寺 黒谷にあり浄土宗鎮西流四箇の一本寺なり塔頭三十一坊 庵室十八軒 寺領百三十石

本堂 南向 圓光大師 座像二尺五六寸許 法然上人自作 寺記云此像當初藝州瀬戸田に安じ東照宮尊命に依て當山に移し所なり其故は是より以前此堂に上人自作の像を安じ然るに此堂失火の為に同祿し時に僧ありて此像を抱きて出んとして共に焼死し此旨 台聴に達す是を惜み彼を憐みたまひて諸國中自作の像を尋ねたまひ遂に得給ふ所なり 同西 栴檀 親鸞聖人像 座像二尺五六寸 聖人自作

阿弥陀堂 本堂の前東傍にあり 西向 堂内敷瓦なり 中央 阿弥陀佛 座像六尺許恵心僧都作恵心生涯彫刻したまふ佛像多し此像は其作のおすあかる故に俗称して乙の如来と云ふなり 脇士 観世音 勢至 近世これを安ず 善導大師像 立像四尺許新作 南檀に安ず

經藏 堂前にあり四方正面にして宝形の釈迦佛 阿弥陀佛 観音 弥勒 地藏 聖徳太子の像等を安置す

觀音堂 経藏の東にあり 西向 本尊千手観音 立像七尺行基作 洛陽観音巡の一なり 吉備大臣像 栴檀に安ず 黒漆座像尺許

當観音堂は往古僧正行基の開基にして願主は右大臣吉備公なり初めは善正寺の傍辺にありて吉田寺と号す然るに後世故ありて滅し此堂のみ當山に移りたりところなり故に堂には尚吉田寺の額を掲く抑此尊像は元正天皇養老年間右大臣吉備公唐土に至りたり彼地にいませし時霊木を得まて 聖武天皇天平五年皈朝して僧正行基と心を合せ千手の像を作れり則ち此本尊なり 帝の叡聞に達し奇異の事なりとて堂を営み國を寄たまへりとぞ委しくは縁起に見えたり

鎧懸松 堂前にあり 傳云熊谷直実遁世して着せし甲を池にてあらひ此松の枝にかけて乾したるとぞ

鎧池 方丈の北庭にあり 上にいふ所なり

昭堂 本堂の東にあり 南向 清正院といふ神君の姫君浅野但馬守長晟の室の塋屋なり

極樂橋 観音堂の東の下に置 池の中に架る

熊谷堂 池の南にあり 東向 蓮池院と号す 本尊阿弥陀佛 座像長二尺許 栴檀 母衣絹御影 法然上人五十二歳の筆これは法然上人蓮生法師と師弟の形見にとて此上人の御そばを鏡にうつし義盛のわろ衣に画きたまふ上人の御影なり 同檀 熊谷蓮生法師自作の像 無官大夫敦盛十六歳の画影敦盛の法名を空顔瑞庄大居士と号す画像は元祖大師の画きたまふ所とぞ 傳て云此地は蓮生坊居住の所なりとぞ

いかしへの澄にまけふ紙衣かせの射る矢も通らざりけり　蓮生坊

極樂に剛の者とや沙汰すらん西に向ひて後見せねば　仝

約束の念仏はまをしつよきぞやくじは弥陀のちかひ　仝

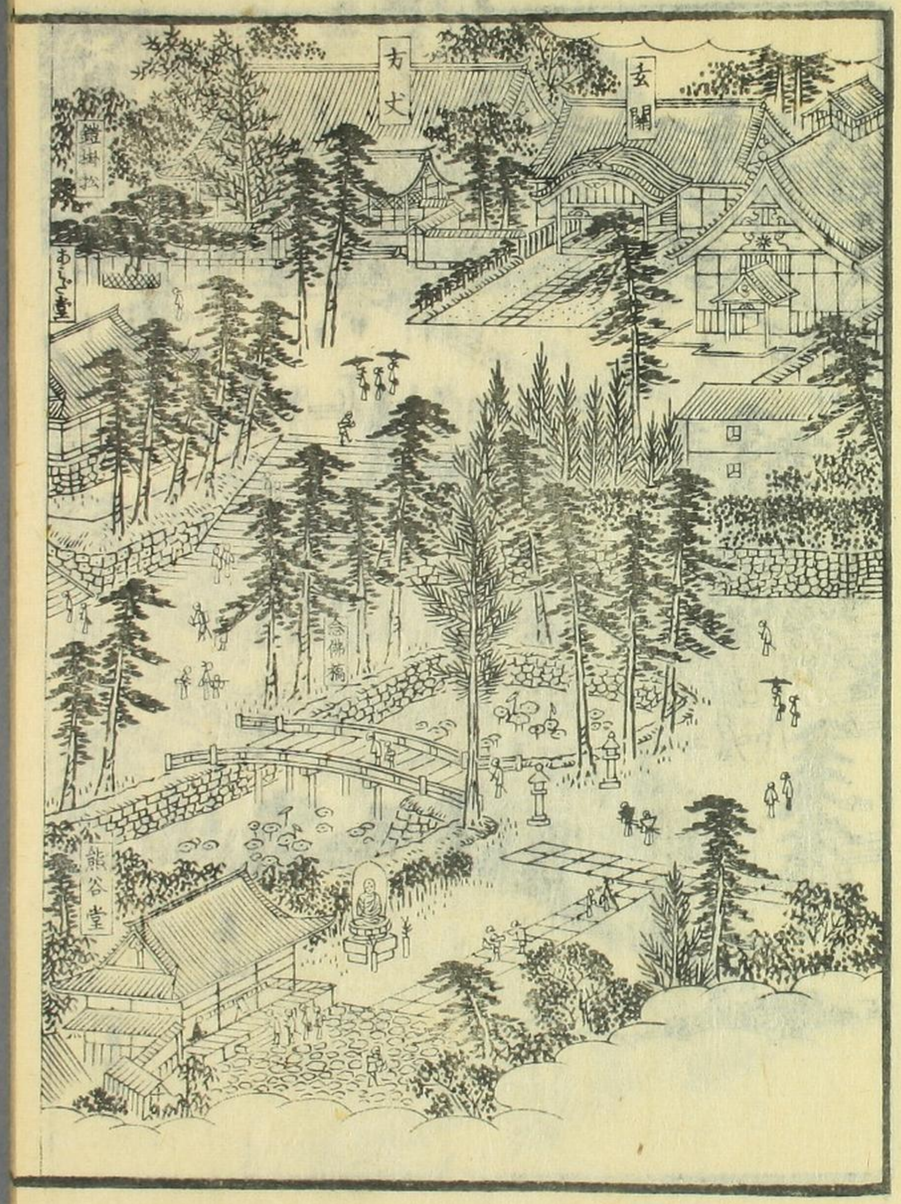
勢至堂 熊谷堂の上の方にあり法然上人の廟堂なり本尊勢至菩薩座像凡一尺五六寸許 新作にして臺座の下に五輪の石塔あり上人は則勢至菩薩の化現なりの謂なり

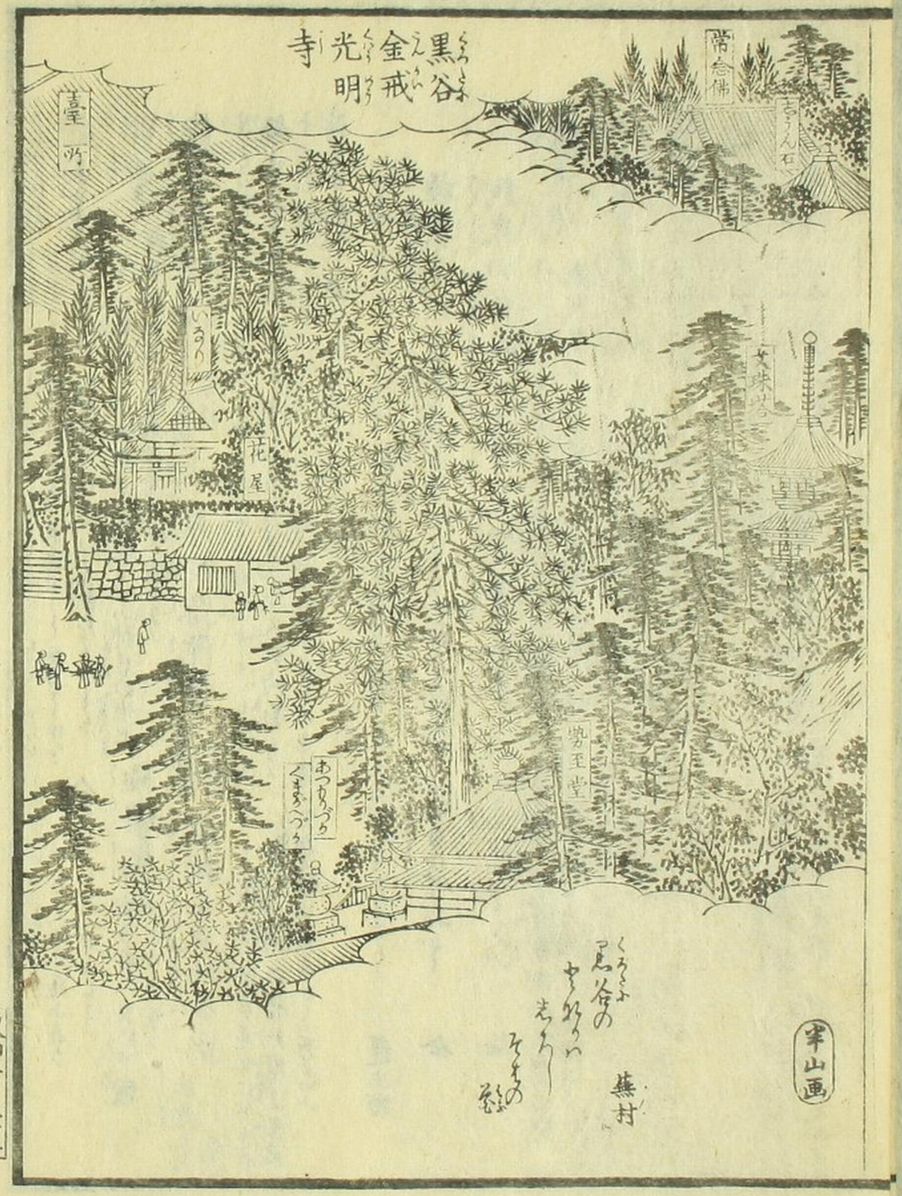
無官大夫敦盛塔 勢至堂の上の方にあり敦盛は平經盛の子なり元暦元年二月七日摂州一の谷にて熊谷直実に討る生年十六歳

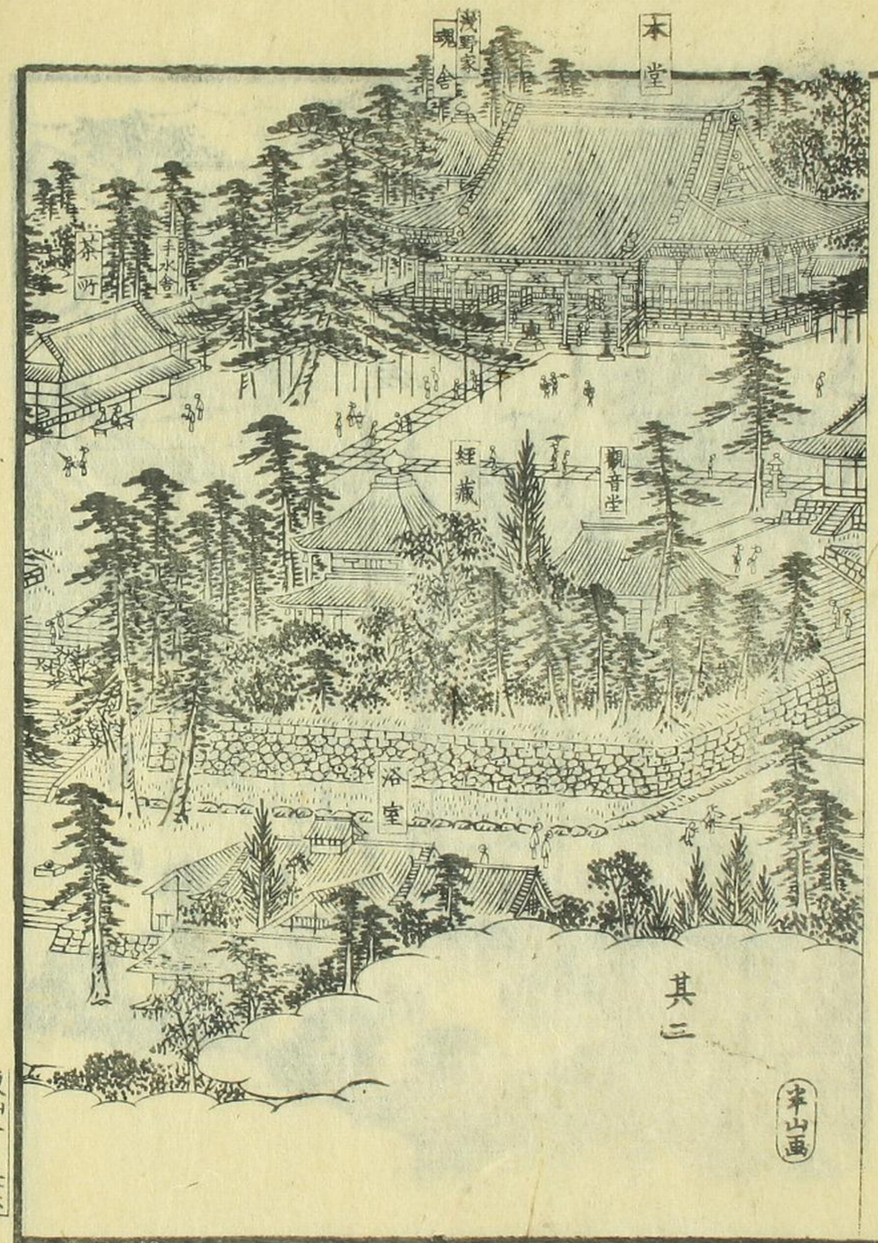
熊谷治郎直實塔 同所の傍にあり熊谷上人の歎に皈入し出家して法力房蓮生法師と云ふ建永二年九月十四日卒す行年八十

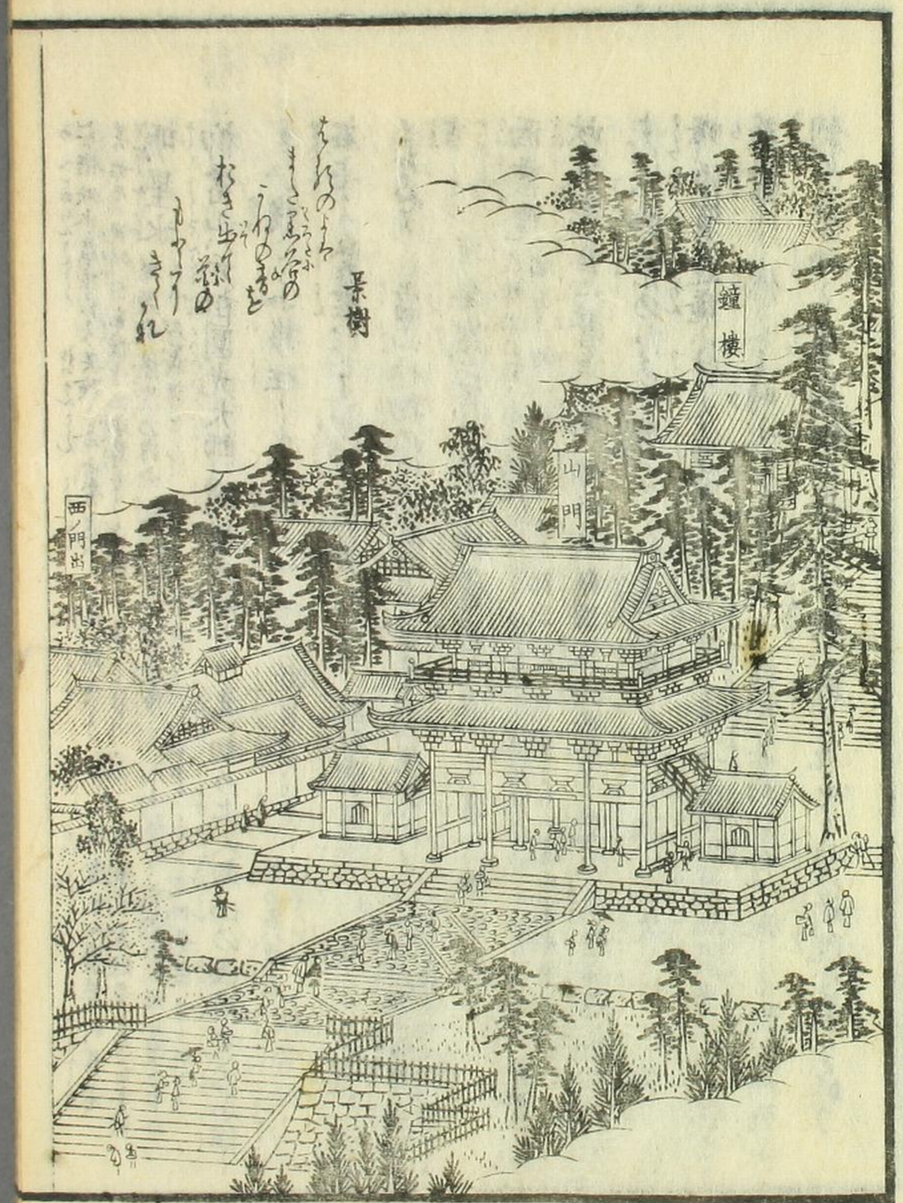
鎮守稲荷社 北傍にして南向 右同所石階の下にあり

三層塔 同所石階の上西向 山の半腹にあり 本尊文殊菩薩 長二尺五六寸許座下獅々凡三尺許日本三文殊の其一なり三文殊とは丹後の切戸大和の


方丈
玄關
四
四
熊谷堂


黒谷
金戒
光明
寺
常念佛
臺所
花屋
東山画


本堂
灌頂家
魂舎
手水舎
茶所
經藏
觀音堂
浴室
其二
東山二ノ三十六
東山画


鐘楼
山門
西ノ門出
景樹

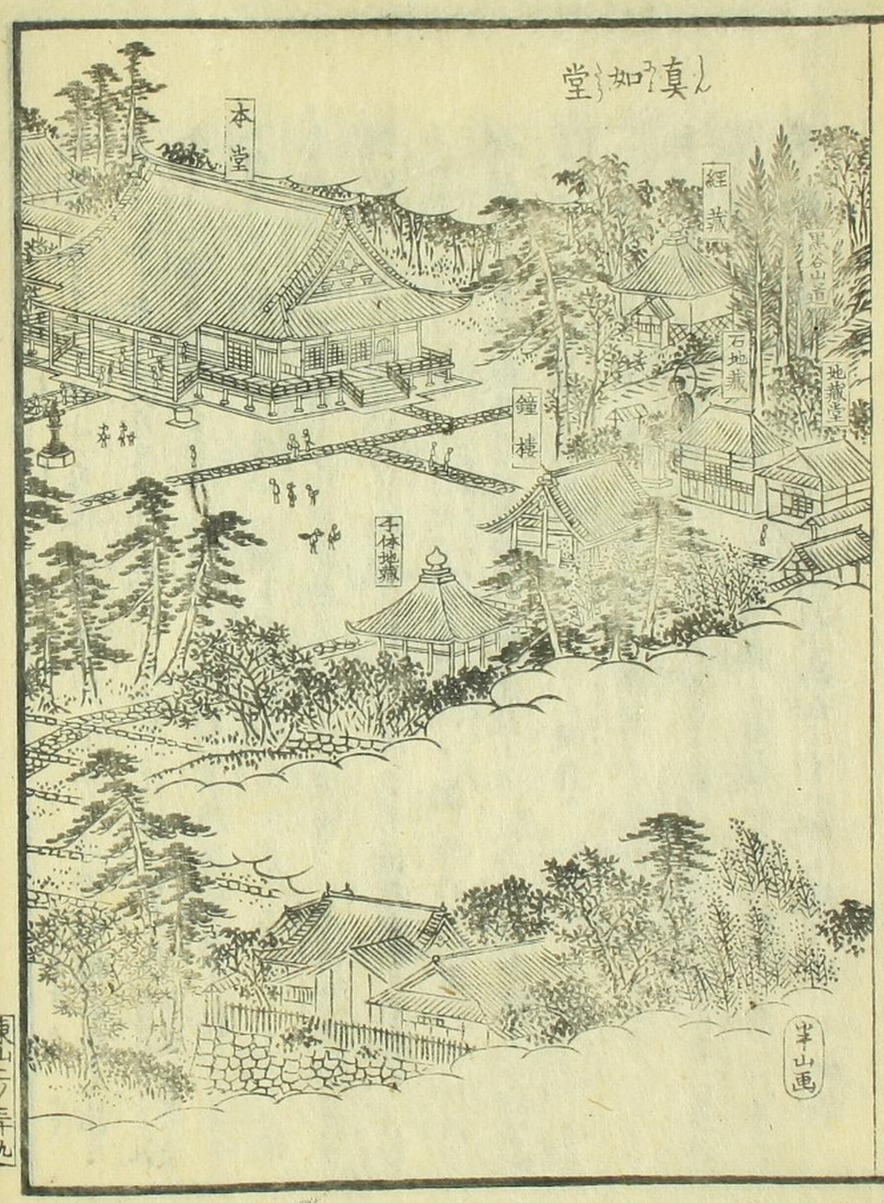
安倍此本尊等ハ霊験古今ニ秀逸ニ世ニ顕ハレ
其若ハ岡崎村宝幢寺の本尊ハ寺後ニ移シ
明星水 塔頭宗搭院の内ニ 浴室 山門の東傍 山門 南向 本堂の正面石壇の下ニ
ハ名義詳ケシ 殿士 維摩居士優婆利尊者
優塡王善財童子等を安シ
柳當山六元祖圓光大師閑棲の地なり其初め上人叡山の西塔黒谷に住し
ましし後こゝに移住しまゝ故に此地を新黒谷と号し原の名栗系 往昔此山の
石上より紫雲たなびく紫雲山と号し摂取常護誓約に准し金戒光明寺
とあらせり 當山付物の中の第一上人自筆の一枚起請文 元祖大師鴨大神宮の神勅に
書しまゝ 有毎歳六月廿五日出拂の日是を出し詣人に拜せしむ 浄土安心の要文と
西雲院 文殊塔の北にあり此院ハ常念仏を修し先年既に一万日不退轉念佛の結
願あり故に世に方日寺と称し心誓宗最上の僧の開基なり
此院開基心誓宗嚴ハ始め朝鮮國某州の人なり豊臣秀吉公朝鮮征伐に
よりて小野某のなる人虜にせられ日本に来る天性男根なし故に到る所閹人に
蜂須賀蓬庵に仕へ又高臺寺政所の亭に事ふ後知恩院満蓮上人に従ひ
薙髪して僧となる時に公方家の侍女一位阿茶局資料を施し院を此所に
創立し依て唐土朝鮮の投化人本朝に於て死する時ハ斯院に葬ると云

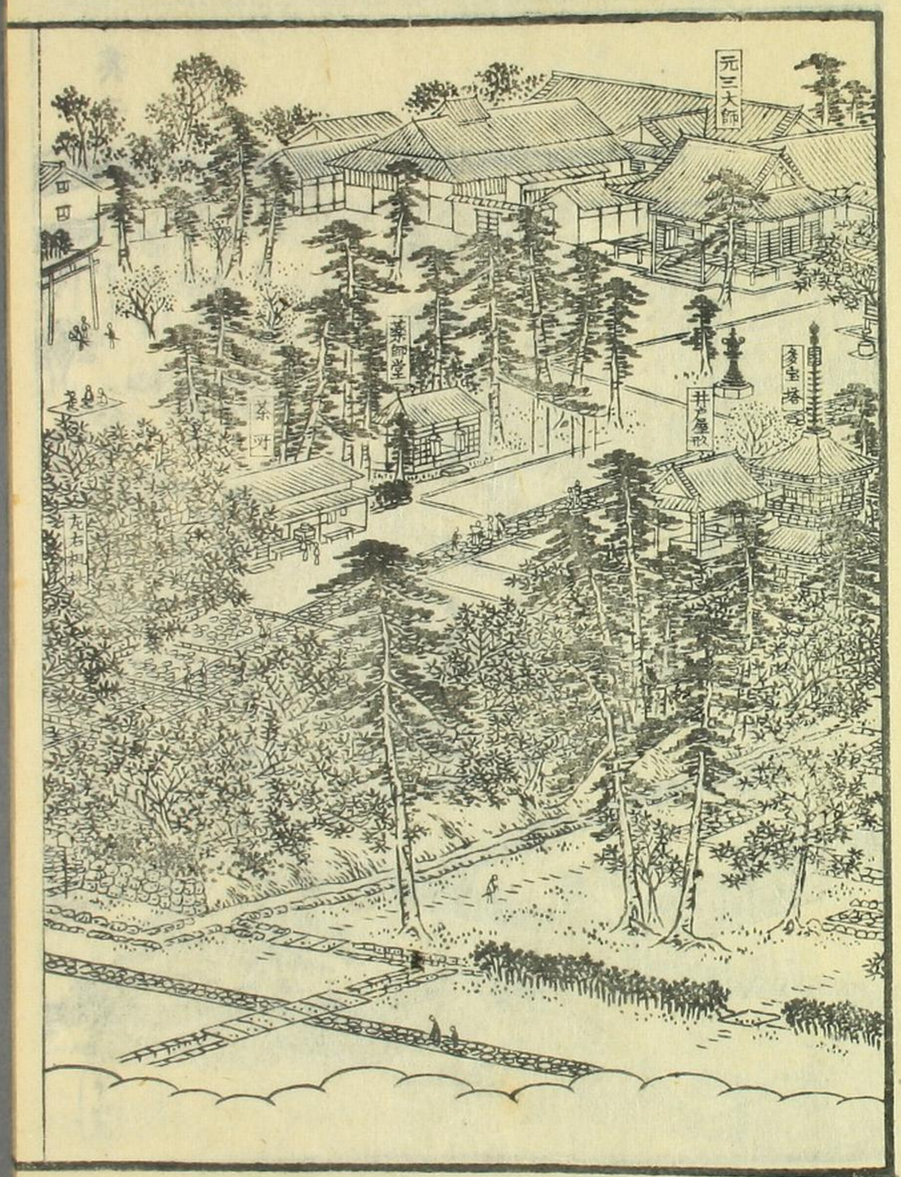
紫雲石 堂前にあり前に云元祖大師一宗開発の時此石上より紫雲たなびき異香
四方に薫じたりと故に紫雲山の号こゝに起る
崇源院殿塔 當山にあり台徳院相公の正妃なり
石川主馬佑吉信碑 刎墓地にあり東照宮の男松平蓬庵守忠吉朝臣薨去の日
稲垣將監守重監物等と共に殉死の人なり
澤村大學助碑 同所にあり細川越中守忠興入道三齋に仕へ同越中守忠利日肥後守
光利に歴たり数度の戰功あり勇臣なり
天野半介正清碑 同所にあり原三河国の人なり慶長年中摂州難波の合戰に
松倉豊後守に属し武功あり尓後西藝に遊事に
山本権兵衛尉源義安碑 同所にあり慶長年中摂州難波の合戰に松倉豊後守
重政に属し河州岸山に於て大坂方の先軍後藤又兵衛
基次と挑戰し義安一番鑓を合せ首級を得と世
稱し尓後豫州に遊事に鐵砲を発し号
山崎閑齋碑 同所にあり閑齋名は宗義一に垂加と号し俗称喜右衛門播州の人
平安に住し當時の鴻儒なり天和二年九月十六日没し行年六十八
王鞬南碑 同所にあり唐土投化の人なり京師にあり医を業とし好て詩文を作り
且筆法に精し前に西雲院の宗叢に好あり葬ること
中山 黒谷光明寺の西の門外にあり今の真如堂の地なり黒谷山の惣名なり謂こゝろ東に
如意山西に神楽岡あり其中間にあり浄光京に俳優中に俗称中山文七と云俳名由男且
浄光菴趾 黒谷北門の外西傍にあり浄光京に俳優中に俗称中山文七と云俳名由男且
おとり浄皆妙寺と呼其伎藝すぐれ盛なる時業を捨て憂しく浄光と修
号しこゝに草庵を結ぶ道世に常に西雲院に寄優中希代の志中山と殊勝なり按に浄光氏を中山と
世に又此地名を中山と云ふ寄なり常行念仏なり
所謂の名誉自性なりの次

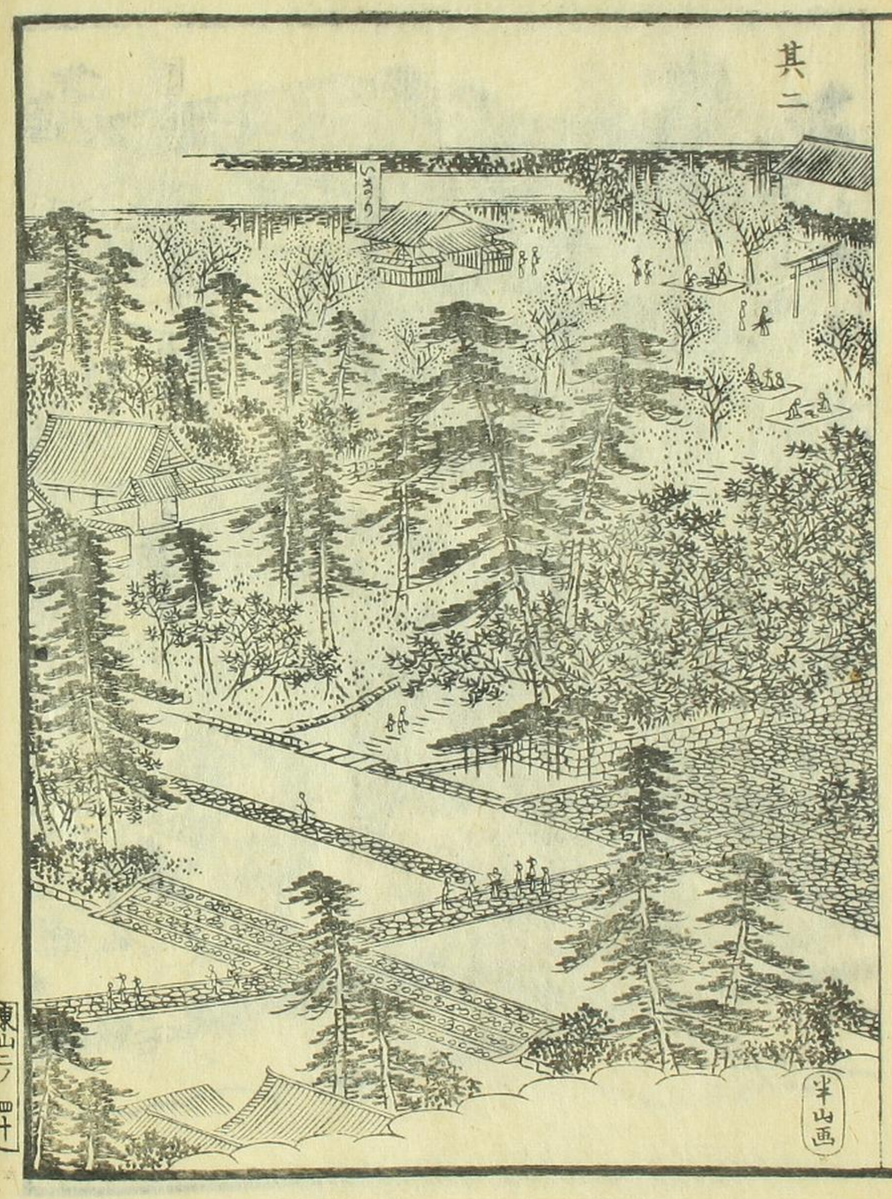
鈴聲山真正極樂寺真如堂　黒谷光明寺の北に隣る宗旨天台日光宮廟支配寺務青蓮院宮塔頭十二箇院　寺領百五石

本堂　西向　中央阿彌陀佛　立像三尺三寸慈覚大師作　脇士左千手観音　立像一尺四五寸許　右不動明王　同　座像一尺四五寸許　慈恵大師座像一尺四五寸許　經藏　本堂の後に西向あり　元三大師堂　本堂の北にあり西向慈恵大師座像一尺四五寸許　左向画影香染の衣袈裟の色分明なり大師自筆　鎌倉地蔵　同南に隣り古仏五尺許　同未像　座像　西向三尊仏を安し　阿弥陀堂　本堂の南にあり西向三尊仏を安し　同檀に地蔵尊千躰の弥陀仏を安し　銅阿弥陀佛　阿弥陀堂の傍にあり座像八尺木食正禅造立享保四己丑八月十五日　正禅血書の法華経を納む　三重塔　堂前南傍にあり四方正面し釈迦弥陀観音跡勢を安し　縣井観音堂　塔の後にあり乗向如意輪観音黄金仏出現云云　千躰地蔵堂　塔の北にあり南向地蔵の尊像と千躰安し　鐘楼　塔の東にあり　鎮守稲荷社　元三堂の西にあり社前桜の林なり　茶堂　千躰地蔵の西に列し南向弥陀釈迦観音等を安し　藥師堂　北側にあり本尊石仏座像一尺五六寸許　十二神将左右に列し立像一尺七八寸許　傳云此本尊石藥師如来は其昔中に安置し数寺瑞あり云云　正親町院の内宇今出川内府勅願堂院の住僧法印全瀛に命じ本院の本尊を造り出川の南今の公家甲の中にあり今尚石藥師通と云ふ　表門　西向黒谷光明寺北門通東側にあり

當寺開祖は戒算上人顧主白河女院なり抑本尊阿弥陀佛は天長年中江州志賀郡苗鹿明神より神水なる栢木を慈覚大師に給ふ大師これを得て住坊に移して此木の伐目より毎夜光明を放つ大師あやしく打割て見るに一片の仏像の佛躰一片の立像の佛形鮮かに在り恰も画るが如し然るに此座像蓮花部の印相の阿弥陀佛と造奉る　此像後に日吉の社念仏堂の本尊なり　今一片立像の形あるを亦刻彫なり其後屢霊夢を得るに入唐求法の願あり遂に仁明天皇の御宇承和五年六月廿二日遣唐使参議右大辨兼相模守藤原常嗣と同船し渡唐し天台山五臺に到り諸明師に見え頭密の法を傳授し殊更北臺の普通院に於て生身の文殊に対顔し親しく浄刹八功徳池の浪の音に准へ調べ作れる引聲の弥陀経を傳授せり其後彼國會昌の兵乱起る是故に無數の勞煩を経て本朝康和十四年十月に勅使と共に歸朝し然るに飯朝の船中にて彼引聲の中一句失念の事あり依て大師焼香禮拝して祈誓し給へるに虚空より瑣小の弥陀の像香煙の中にあらはれ給ひ失念の文句成就如是功徳莊厳と漢音にて唱へ給ふ師佛に對し願くは吾國に来り給ひ衆生の苦を度し給へと掌を捧ぐるに忽ちこれ影向し給ふ即ち移し包み飯朝し


本堂
真如堂
経蔵
東谷山道
石地蔵
地蔵堂
鐘楼
子休地蔵
半山亭

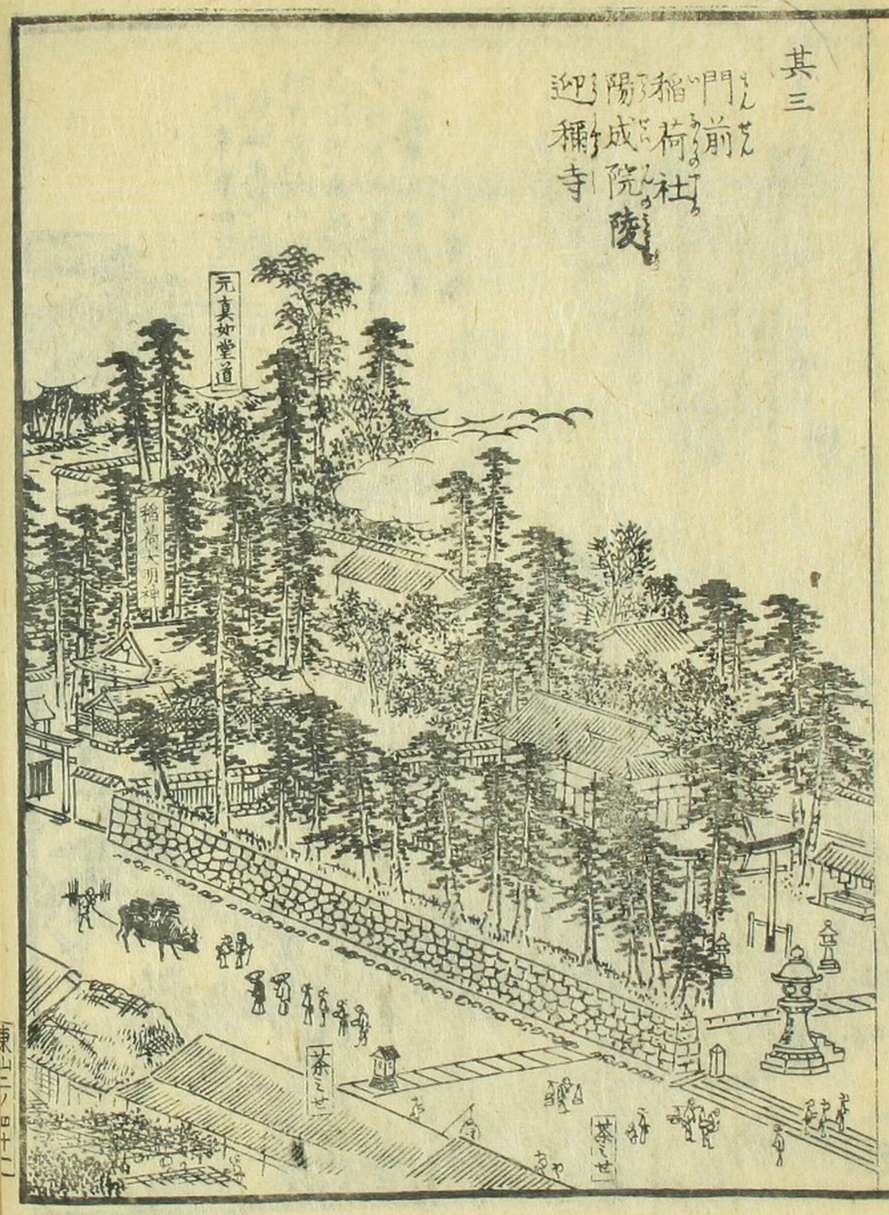

元三大師
四天
藥師堂
多宝塔
井戸屋形
茶所
九右衛門

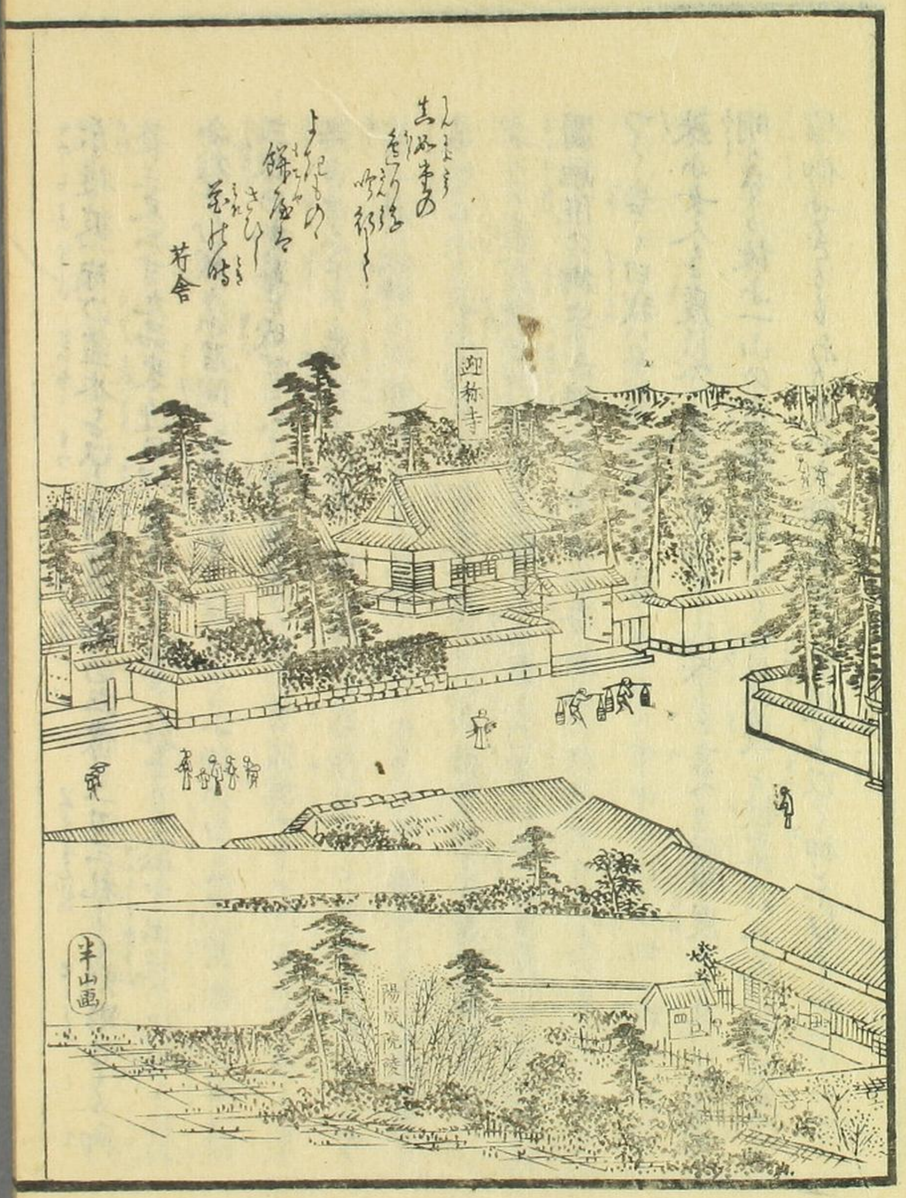

其二
半山画

秋季真如堂
観楓晩間遇雨
楓寺靠山山色開
若紅寒翠映行杯
不妨急雨驚吟席
一洗幾多秋錦来
中島規
野山ふみ
去来
表門

其三

門前
稲荷社
陽成院陵
迎稱寺





芋舎

尓後彼一片の霊木を以て阿弥陀佛の立像を一刀三礼して刻彫せる御長三尺三寸九品来迎の印當寺の本尊これなり又船中出現の化佛と胎内に
ふかきむ然るふ眉間の白毫いまゝ具せるふ師の白く當山圓頓の行者四種三昧の本尊と成せゝと有ふ佛像三回かゝり揺せゝふ師なゝ然らい聚洛市中ふ下ゝ衆生を引接し給ひ殊ふ罪障重き女身等を救ひゝふやと有ゝれば此時三回領状しゝり此故ふ自ら生身の佛躰ふゝまゝせば重く截彫ふべきふあらゝ白毫を作らゝ其後聚樂安置の霊地とうゝひ求めゝふだ決せゝ年月を経て先叡山の常行堂ふ安置し大師入滅の後圓融院の御宇永観二年甲申の春叡山の住僧戒算上人の夢ふ老僧来つゝ告ゝ曰我い異常行堂より来るなり市中ふ出ゝ一切の群生を利益殊ふ女人を度らべ急ぎ下山せゝむべゝと言へり此事度々ふ及びゝ霊告明らかなる故ふ一山の衆徒を招きゝ如此の義を披露し三院の衆徒の中ふ信仰せざるもあり又い大師在世の霊現を以ゝ押ゝむるも如何とゝも

有ゝ遂ふ同ゝ先西坂の禁雲母坂の地蔵堂ふ迂ゝ奉るなり此夜又夢中ふ老僧来つゝ云く山城國神樂岡の邊ふ長尺余の檜一千本一夜ふ生ずる所あるべゝこれ則佛法有縁の所末世相應真正極樂の霊土なりと（今真正極ふ寺の号此夢の故なり）上人霊告ふ驚きゝ早朝ふ弟子を下ゝ彼地を見せゝむるゝ白河の女院の殿舎の境内ふ檜出生ゝなり元真如堂の敷地是なり又其夜白河女院（一條院の母后東三條女院）の御夢ふ老僧来つゝ曰我い叡山常行堂より来もとり女身濟度の誓願ふよつゝ聚樂ふ下る后の殿中ふ至らんゝ告のつゝ女院此霊夢ふおどろきのひゝ叡山ふ使の者を遣し給ふ上人い又檜出生の事を尋ね求ん為ふ蕭ふ下されゝ僧と雙方西坂ふゝ行合なりたるひふ霊現のようを語ゝ分れる斯有ゝ程ふ先女院の殿中ふ右の尊像を移ゝ奉る此時いこれ一條院の御宇正暦三壬申年の秋なり頓ゝ地を點ゝ佛閣となゝふさゝ此草創の時童子一人蓮華織の錦ふ土を裏ゝ持来ゝ上人ふ語ゝ曰此い是天竺王舎城者闍崛山の土なり釋尊観無量壽経を説

ゝき無數の衆生法を聞く得道し頻婆娑羅及び韋提希夫人往生をとげ阿闍世卽善道に歸し奈其説法の座下の上なり吾長く當山を擁護せべし上人の慈悲眞正眞如の眞心を觀ずるがゆゑに來現し七寶の壇を築く此靈土を收め其上に如來を座せしめ奉つれゝ上人信敬し是をとゝけ如來の丙足の下に收む又童子の曰吾名を蓮華童子と稱し吾安住の地如來の座下の山に於くは醍醐味の清泉あゝ佛閣の後門の中つゝ閼伽井を堀べし彼邊に住せんとゝ畢つゝ去ぬ是に依く井を堀て清泉出現し童子の教に任せく靈水の所を彼門の中く靈土を壇上に納めく其上に御厨子を建立し同五年甲午八月十一日如來を遷座し奉る是則女院殿舍を以く造立へ莊嚴珠玉を鏤め寄附しき戒算上人此に住職し天喜元年癸巳正月廿七日に化し壽齡九十一歲也以上緣起の採要 照士の丙尊に始め安置する所は共に靈驗の像なく緣起のせゝ詳なり然るに近世洛陽に於く燒失し今の像は其後作る所也

當寺は往昔此所に有く文明九年三月廿九日に洛陽に遷し其後東山慈照院義政公の尊崇ふかつゝ同十六年甲辰六月朔日又此地に遷し返し其後又文亀三年癸亥四月七日再び洛陽の元の地方に遷る元祿五年冬煙燒の故に同六年又今の地に遷る後醍醐天皇吉野より御寄附の佛舍利あり綸旨左の如し

佛舍利一粒被爲御寄進之間永當寺爲靈寶勤行不可有懈怠天氣如此仍執達如件

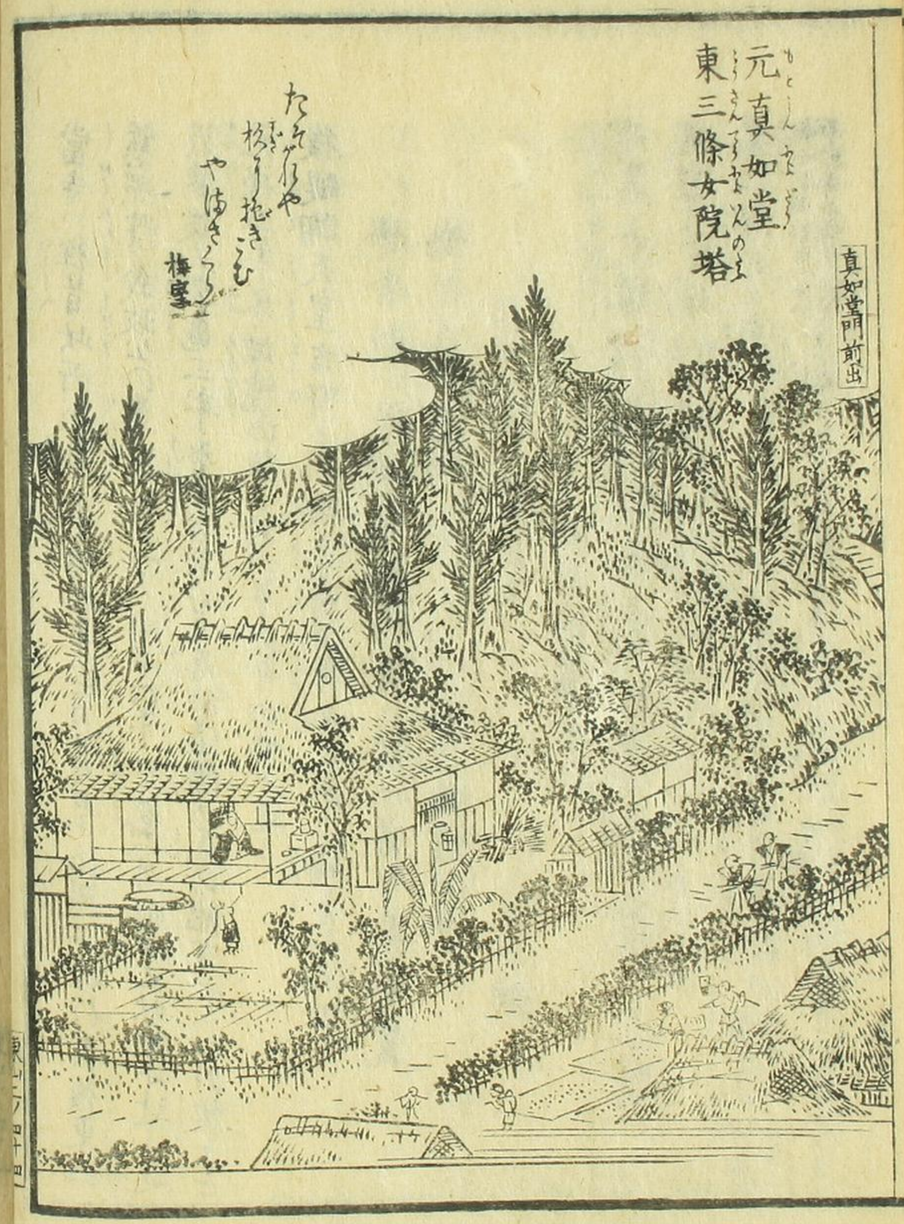
正中二年三月六日　　右少辨

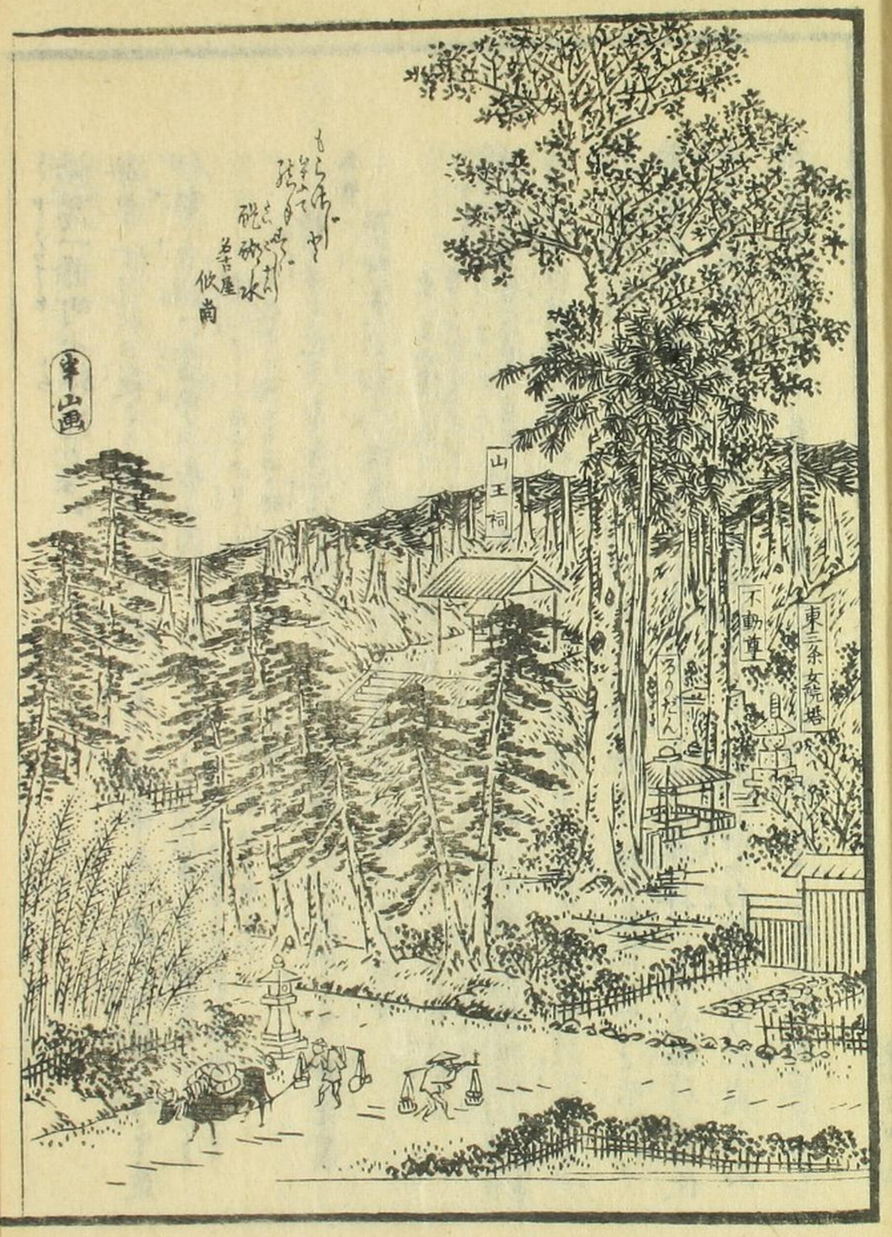
真如堂別當御房

戒算上人像 恵像黑法服地紫紋白五條左に向し　青蓮院尊證親王筆寄附しる所也

戒算上人塔 本堂の艮方にあり天喜元年癸巳正月廿七日寂 壽九十一歲 南向 則ち是開山の石塔婆なり

當山緣起云應仁二年八月三日逆乱に依く西塔黑谷に移し 應仁の兵乱の時 本尊と一緒 叡山の西塔黑谷 書龍寺に移せり 文明二年三月十五日宂太に遷し 東坂本宝光院 同九年三月廿六日


元真如堂
東三條女院塔
たちかへるや
松のうれにかきこむ
やはきくらん
梅室
真如堂門前出


もらせるや
砂水
名古屋
依尚
東三条女院塔
不動尊
山王祠
東山

洛陽一條町ニ移ス云云

毎年十月六日夜より同十六日の朝ニ至て法事あり是を十夜と称す是

伊勢貞國の霊夢の告ニ因てなり也とぞ十夜の法事とは原當寺より始まる後ハ浄土宗ハ又これを修行すと云り

應仁のころ田中の里の賤女学本ニ日参し念仏を申さゞ心経の一巻ある時礼堂ニ暇乞れば内陣より

時るゝ名きなき法と捨ふ一切思惟ハなゞあぞとも　真聖集

玉葉

弥陀たのむ人ハ雨夜の月おれやこゝ清ぬ西へこそゆけ

此ハ法如堂ニ詣て浮世の悲願の扶のき事を思ひ出るゝ我身の罪障を告させ給へ

稲荷社日門前の北にあり　拝殿日下壇ニ　鳥居日上　額日本最初稲荷明神社清水谷

當山の鎮守）南向　実秋筆

寺記云往昔當山の住職三の峯稲荷明神を尊信し常ニ詣ル一夜夢ニ

明神現れ給ひ鈴聲山ハ清浄無垢の霊地なり速ニ勧請せべしと告あつ

夢覚ぬ夙ニ起て堂前と見れば奇童一人ありて手ニ宝珠を捧ゝ曰我是稲荷の神使

なり此宝珠を汝ニ与べしとの神勅なりと授け忽ち白狐ありて飛去ぬ

神慮奇異なりと急ぎ三の峯ニ詣ル別當僧圓ニ此よりと告るに我も昨夜夢を

感じ其体正く符合せりと互ニ語て歓喜し則神像を別當ニ寄附せ給ふ故ニ當

山ニ社を営て佛法擁護の鎮守とし例歳二月初午の日諸人群参して頗る賑ふ

山王社日西ニ隣る祭神十禅師　御供所日所東傍ニあり

并三猿の像を祀る

陽成天皇陵日門前西側人家の裏ニあり高サ三尺除東西十一間許南北九間許總根廻四十間

許の冢なり陵上ニ樹木なし小篠生茂れり

日本紀略曰天暦三年九月廿九日己巳此暁太上天皇崩于冷泉院春秋八十二即

奉移圓覚寺十月三日壬申今夜奉葬於神樂岡東地十一月十八日丁巳埋

於圓覚寺修陽成院七々御熊

大鏡裏書曰天暦三年九月廿日崩于冷泉院春秋八十一同十月三日奉葬神樂岡東地

元真如堂真如堂北東下壇の地なり真如堂の本堂なり叡山常行堂ニ在せし時一條院の母后自河女院又叡山の戒算上人ニ求世女人渡度の為聚落ニ下るべし其所ニハ天余の檀千本一夜ニ生ずるなり霊夢あり多ち白河女院の殿舎の境地ニ檜木生出ずと其所ニ其時の日地なり

本尊阿弥陀佛丈像三尺二寸慈覚大師の作　白河院宸影同女院御影共ニ画影

蓮華童子附属瑠璃壇真如堂草創のとき現れ天竺耆闍崛山の土を持来り戒算上人ニ授く我なり仏岡の辺りニ住し仏法

擁護ならべし因伽井を堀へし醍醐味の清泉あり是我住所なり語畢て去ぬ古跡　醍醐水堂の北下壇の地ニあり

東三條女院塔　右同所ニあり五輪の石塔婆なり女院ハ一條帝の母公ニ〳〵坊地ハ則ち離宮の跡なり長保三年閏十三月崩年四十烏部野ニ葬る御遺骨今ハ又ハ御供養の塔なるべし

山王權現社　右同所の南上の方ニあり東向當村の生土神なり　例祭九月廿日

一説ニ此五八後一条院の陵なれども未だ其事実詳ならず京極一條ニあり故ニ一條道場と云

迎稱寺　真如堂門前の北ニあり南向時宗なり〳〵當宗と改む

四天名宗中興一遍上人の化導なり〳〵

本尊阿弥陀佛　立像三尺許　脱檀不空羂索観世音　立像五尺許　恵心作并ニ

一遍上人の像を安ず

芝藥師　同西ニ隣る靈芝山大興寺と号ず旧ハ大宮五辻ニあり今芝藥師寺と〳〵

往昔天台宗今禪寺なる東福寺潭月叡澄禪師中興

本尊瑠璃光佛　座像三尺五寸運慶の作　十二神將立像三尺許　同作左右ニ列ず

當寺ハ後鳥羽院の御建立ニ〳〵則勅願所なり叡山ハ女人禁制の山なれども婦人登る事と得ざれども仏工運慶ニ勅あり〳〵中堂の藥師仏を模作らるる三の宮のためニ禁闕の西の方ニ四畳四方ニ地をひき仏殿法堂庫裏僧徒山門鐘楼方丈等を建たり其後文治三年武蔵守源朝臣飯依甚と深し〳〵と云々

尚委くハ寺記ニ見たり藥王殿の額ハ朝鮮紫峯筆

蜀關羽像　脱檀ニ安ず関帝の額をかく南窓武幹の筆なり

寺記ニ云此関羽將軍の像ハ足利將軍尊氏公ある夜の夢ニ女来り〳〵昔て但く

作らるる三の宮のためニ禁闕の西の方ニ四畳四方ニ地をひき仏殿法堂庫裏僧徒山門鐘楼方丈等を建たり其後文治三年武蔵守源朝臣飯依甚と深し〳〵と云々

今汝ハ百戦百勝の術を教ん大元国ニ軍神を求めて信仰すべしと夢の如く元朝ニ言送り

求るニ関羽將軍の像を送れり尊氏此寺の傍ニ安置し〳〵庄園ニハ丹州波見保勢州天花寺小野村等を寄せ〳〵其御教書今尚寺ニあり又家臣高師直ハ狀あり且

後鳥羽院御寄附の仏舎利あり什宝ニ其初芝藥師寺ニあり〳〵其後京極今出川の南ニ移る元禄九年炎焼の後

この地ニ〳〵

極樂寺　同西ニ隣る宗旨ハ時宗藤澤ニ属ず其〳〵ハ天台宗ニ〳〵恵心僧都の開基なり只一條戻橋の東ニあり後世こふ極

本尊毘沙門天　立像五尺三寸　脱士　左右ニ大黒天菅神御作二尺許

恵心の作　恵美酒神運慶の作立像一尺二寸許

中頃鹿苑院義満將軍當寺を飯依し給ふ後ニ廃せ〳〵と一遍上人再興て

時宗と〳〵舊此寺ハ芝藥師の北ニ有し〳〵を後世此地ニ轉ずる所なり

東北院　同西ニ隣る時宗なり〳〵藤沢ニ属ず本堂の額東北院の三字

後西院の宸筆なり雲水山と号ず

本尊辨財天女　立像二尺三寸許　脱士　左毘沙門天王右摩迦羅天

共ニ傳教大師の作と云

傳教大師の作　衣冠束帯座像一尺許道長公関白兼家公の男正一位摂政太政大臣

関白道長公像　万寿四年十二月四日ニ薨ず法成寺殿と号ず

和泉式部塔　寺内ニあり　雲水井　堂前の西ニ　軒端梅　堂前ニ　鎮守祠　雲水井の南ニ隣る雲水明神と号ず

抑往昔東北院と云ハ上東門院の御願ニ〳〵御父御堂関白道長公の棲ま

ま〳〵法成寺の傍ニ造らせ〳〵續世継ニ見えたり　拾芥抄ニハ一條の南京極の

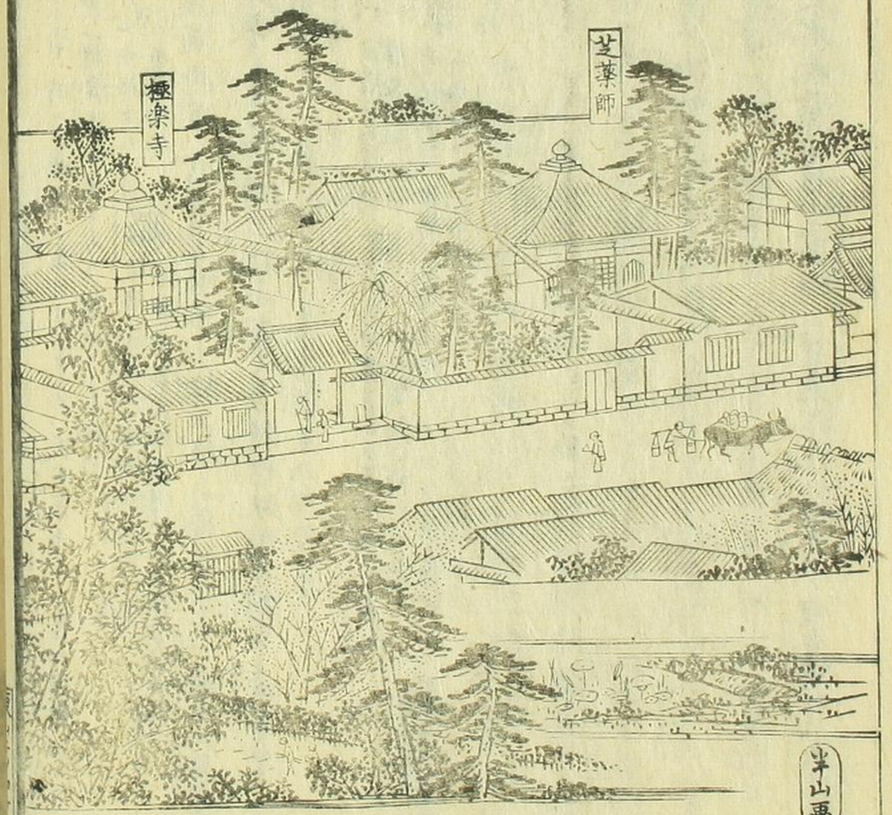
東なる上東門院の御所法成寺の内東北の隅なりとて扶桑略記ニハ長元三年

八月廿日上東門院東北院を供養有し由と書り落慶の導師ハ僧正慶命なり

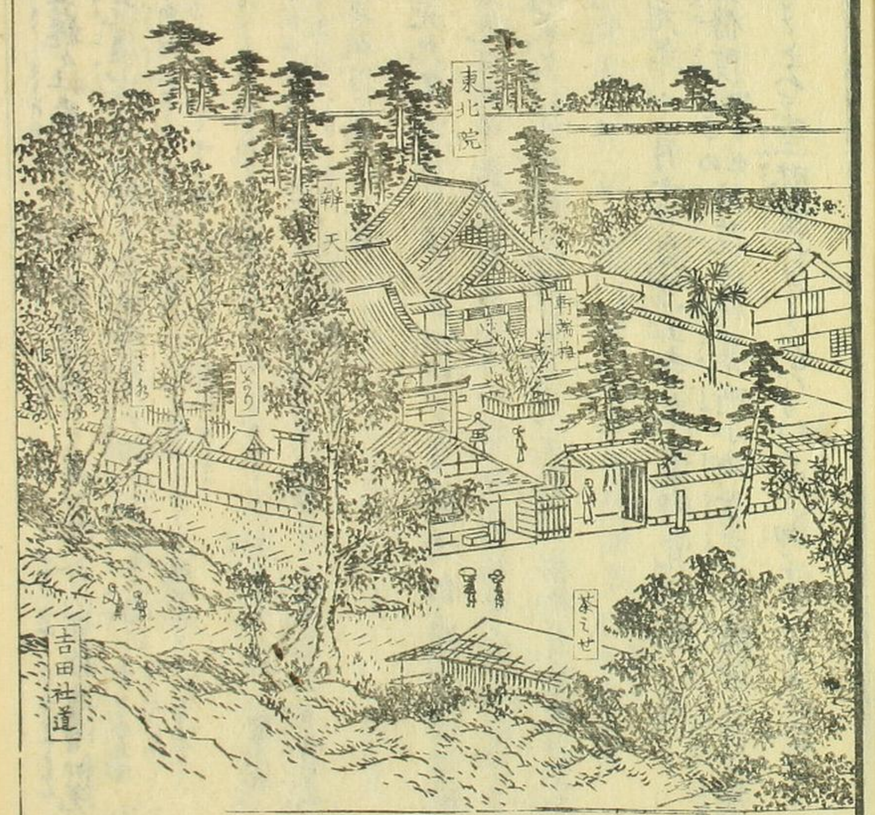
釋書ニ載たり又永承年十月十三日出　天皇東北院ニ行幸ある由百練抄ニ見えたり

芝藥師
極樂寺
東北院

蓮の香や
池一ぱいに
ひろがる
六和



鈴聲山下妙音
臺曾在九重東
北限門外車從
火宅出蒼前梅
映雲沼開創菅
佛開詔傳教永
鎮王城崇辯才
寓是歸依同長
者布金光耀起
三台　釋叡道



然れば古へ伽藍巍々壮麗ゆゑ天台宗の浄刹なり其旧地は今の京極通清和院の御門の北遣迎院廬山寺等の地なり委花落旧跡多詰ゆゑ略す　當寺の再興は元禄年間の事なり

和泉式部の塔雲水町端梅等今は所々ふるあり皆東北なり詳曲ふるく後世作なるべし

東北院の墨ことゝめ中ゆ水よ流れよ流れよ

続後撰

新古今　もうきこゝろなるこゝろ落てひかるゝ沈の香の煙　紫式部

菩提樹院古趾　右同所の辺より北へ則神楽岡の東の藤なり拾芥抄云菩提樹院は神楽岡の東上東門院の御領なり

後一條帝陵　菩提樹院の地なり云

日本紀畧曰天元九年四月十七日乙丑戌刻天皇落飾即崩于清涼殿春秋二十九五月十九日丙申奉火葬浄土寺西原神樂岡東面也中略從今日立伽藍於神樂岡東名曰菩提樹院御葬之間長家以下拾御骨安置浄土寺百練抄曰長暦元年六月二日上東門院供養菩提樹院後條御墓所号櫻本

東書云長久元年十一月十日自浄土寺奉遷御骨此院

榮花物語曰二條院此帝の御女也故院の御墓所ゆゑ御堂立させ給ひ菩提樹院とゝ東山なるところゆゑ三昧堂なりけれなるかさゝ御堂なりさせ給ひ云々

故院の御影をかき奉りたる

歴代編年集成云後一條院男子不坐御女二條院安置菩提樹院云

一説ゆゑ前云東北院の庭前西北の隅ゆゑ高サ四尺許根廻九間余なる塚あり是一條帝并上東門院の御墓なりと云々五十年以前まゝ石の御塔あり其後つゝの程ゆゑ御塔失せたれば近年冢の上に弁財天の小祠を建つ然れつゝへの菩提樹院の旧地の松原なりゆゑ今の東北院を此所に移し立て今はさる古跡も定なりし斯のごとくなりぬ云々

櫻本　右同所より北へ神樂岡中山のひゝ康ケ谷村四成寺の書地へうけしの名なり大鏡裏書ゆゑ後一条中宮藤原威子を四成寺の北櫻本ゆゑ奏ほゝあるまゝ百錬抄ゆゑ菩提樹院後一條御墓所

接下や見えたり同所なり

つゝ侍々

玉葉

櫻本こゝ中ゆゑ

榮花物語云北の方の墓ゆゑ櫻本ゆゑ

あるかなきかの御ゆゑ

櫻本寺旧趾　前日所一説ゆゑ菩提樹院を櫻本寺と唱なる様ゆゑ櫻本の名なり今冷泉院の御時奏櫻本寺乾原ゆゑ支編年集成ゆゑ載せられ

周防内侍

中納言

帥殿

菩提樹院ハ夫より遥のち一条院の御時御建立あるべし寺ゆゑ當ゆゑ若くハ
四成寺の一名と樓本寺と呼ゝ或ハ別ゆ樓本寺と称せ寺有ゆゑ今詳ならず

冷泉帝陵　吉田山の艮の麓ゆゑ山陵志ゆ丘北之畝呼家圓處坎也既被毀傷と
皇年代私記云寛弘八年十月廿四日崩十一月廿六日葬於櫻本乾原
或云櫻本寺西北ゆ葬ゆ遺骨を山側ゆ藏むと　按ゆ吉田山の艮ハ櫻本の乾と有ゆ大概脊合ゆ
又一説ゆ冷泉院陵ハ北山小野郷ゆ有ゆ其所ゆ堂を樓本寺ゆ
いひ傳へ有れ當ゆ北山名所ゆ奉ゆ弁ゆ

大塔屋敷　吉田山の東の麓ゆ元真如堂の西南ゆ有り相傳ゆ始真如堂中多宝塔のあるゆ
別院ゆ在ゆ是より白川へ出るの径路と大塔道ゆ一説ゆ大塔官尊雲法親王の
あやまり傳ゆたるん歟

源頼政朝臣堂　今其古蹟詳ならず百錬抄云治承二年二月廿日頼政朝臣菩提樹院の辺ゆ
一堂を建立ゆ供養ゆ云々

山槐記云治承三年正月廿九日戊子向東山堂云云爲近隣容々禮頼政

朝臣堂　在菩提樹院南辺

同山莊　右同所の辺ゆ一説ゆ黒谷の北の門外ゆ云

東鑑云治承四年五月廿四日入道三品家中山堂并山莊燒云云
是則ち高倉宮ゆ御謀叛をまゐらせ宮密ゆ三井寺ゆ入ゆ頼政家向の時自ら放火
燒ゆ宅ハ山槐記ゆ近衛の南河原の東ゆ

神樂岡　俗ゆ吉田山と云黒谷の北西ゆ有り南北四町ゆ有りの一壇の丘山なり此所ハ神代
の時天照ゆ神天石窟ゆ入給ゆ八百万神たち集ゆ神樂を奏ゆ其所々
一の山と有る高野山如意ゆ嶽ゆ有れ其後事勝神鴨御神此ゆ集ゆ神代の樂を奏ゆ
故ゆ神樂岡と云ゆ神系傳ゆ見えゆ此丘山東の方ハ一円の平地ゆ妖咀と
さる程ゆ老幼婦女子と云へ遊び戯ゆ心を労ゆ殊ゆ神社仏閣の構なく
催ゆ竹中稲荷菅神ゆの社ゆの原来四方の風景よく春ハ櫻つゝ咲ゆ都下の
貴賤童ゆ引具ゆ破子さゝえを提ゆ連日を供ゆ東ゆ又長月の末ゆ紅葉の
錦ゆ折ゆ下此地ゆ来ゆ秋の日の短きと惜む多ゆ又革ゆ男女ゆ也れ愛ゆ
しの樹下をあゆ寄ゆ得たり顔よばゆ楽ゆ奥あり尤花洛ハ四時遊宴の地の訳多
なり支他邦ゆ超たりと云へ別ゆ岱岡ハ平穏ゆゆ遊ゆ便よきゆ又都ゆ比類なりき

新古今　若々代を祈るいのりの神樂岡松も千とせの名やそふん　衣笠内府

流撰吟ゆ岡篠　高き木のゆゑ有る高のみさゆなり神樂岡への長き陰原　道良

新宮哥合　桂ゆくなり都ゆ笠ゆ有る神樂の岡の長き蔭の苔　範光

神樂岡さゝ木の枝もてゆれ有る神ゆ陰なれ　景樹

茸ゆ草ゆ下ゆ敷ゆ神樂をか　巴川

九月　草香能引入烟蘿巖往起紅塵
松林自絶麓慶跡剩見綺羅雲外新　皆川允

卜部家齋場所　右同所ゆあり元京師近衛室町の私第ゆ在ゆ夏ハ長奥日記ゆ云
文明十六年兼倶卿ゆ移

本殿 南向 八角造萱葺棟行 東西より南西破風
軒の内中央

額 日本國中三千餘座 天神地祇八百万神 清水谷實秋卿筆

大額 日本最上 日高日宮 嵯峨帝宸筆 小額 太元宮 後土御門帝宸筆

八神殿 本殿の後あり都合八社列に南向

祭神 神皇産霊神 高御産霊神 玉積産霊神 生産霊神 足産霊神 大宮賣神 御食津神

事代主神 已上神祇官八神殿是なり或は高御産霊神を除きて道反飛神と加へ
右八柱の神八州守護の鎮神八尊霊神八心府の神なり坐す故なり皇帝の鎮魂の神
なりと神系図傳に見えたり此神殿古へ神祇官にあり旧地今二條所司部の北なり秀吉公
聚楽の城廓造営の時命ありて今の所に移す

鳥居 右社前にあり 額 元本八神殿 後土御門帝宸筆
木柱

外宮 八神殿の西に隣る 鳥居 南向 木柱 額 外宮宗内宮 八神殿の東にあり 鳥居 南向 木柱 額 内宮源
右西宮の額は東山義政公の室蘆富子の筆なり内宮の額は

日本國中總攝社 本殿の東西にあり東の方北山城国始より西の方の北對馬国に至る額其国々の毎社に掲ぐ

山城國中 百二十二神　大和國中 二百八十六神　河内國中 百十三神　和泉國中 六十二神　摂津國中 七十五神　伊賀國中 二十五神
伊勢國中 二百五十三神　志摩國中 三神　尾張國中 百二十一神　参河國中 二十六神　遠江國中 六十二神　駿河國中 二十二神
甲斐國中 二十神　伊豆國中 九十二神　相模國中 十三神　武蔵國中 四十四神　安房國中 六神　上総國中 五神
下総國中 十一神　常陸國中 二十八神　近江國中 百九十九神　美濃國中 三十九神　飛騨國中 八神　信濃國中 三十八神
上野國中 十一神　下野國中 十一神　陸奥國中 百神　出羽國中 九神　若狭國中 四十二神　越前國中 百二十六神

加賀國中 四十二神　能登國中 四十三神　越中國中 三十四神　越後國中 五十六神　佐渡國中 九神　丹波國中 七十一神
丹後國中 六十五神　但馬國中 百三十一神　因幡國中 五十神　伯耆國中 六神　出雲國中 百八十七神　石見國中 三十四神
隱岐國中 十六神　播磨國中 五十神　美作國中 十一神　備前國中 二十六神　備中國中 十八神　備後國中 十七神
安藝國中 三神　周防國中 十神　長門國中 五神　紀伊國中 十一神　淡路國中 十三神　阿波國中 五十神
讃岐國中 二十四神　伊豫國中 四神　土佐國中 二十一神　筑前國中 十九神　筑後國中 四神　豊前國中 六神
豊後國中 六神　肥前國中 四神　肥後國中 四神　日向國中 四神　大隅國中 五神　薩摩國中 二神
壹岐國中 二十四神　對馬國中 二十九神　已上三千六十三神吉田家之勸請而有別傳云云

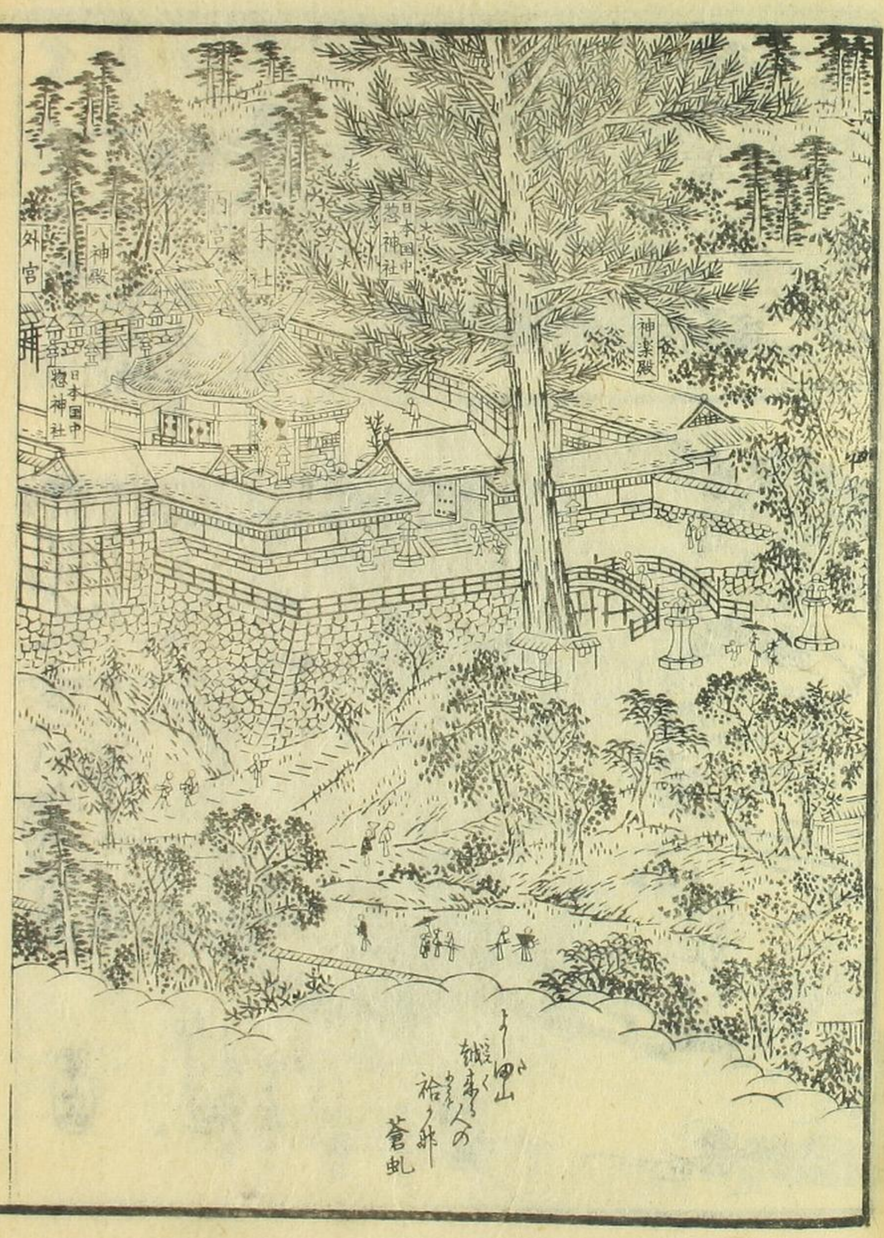
神樂殿 社前の東傍にあり西向　参籠所 門西傍にあり神官参籠の館なり　中門 本殿の正面にあり南向　額 日本最上 神祇官場 清水谷實秋筆

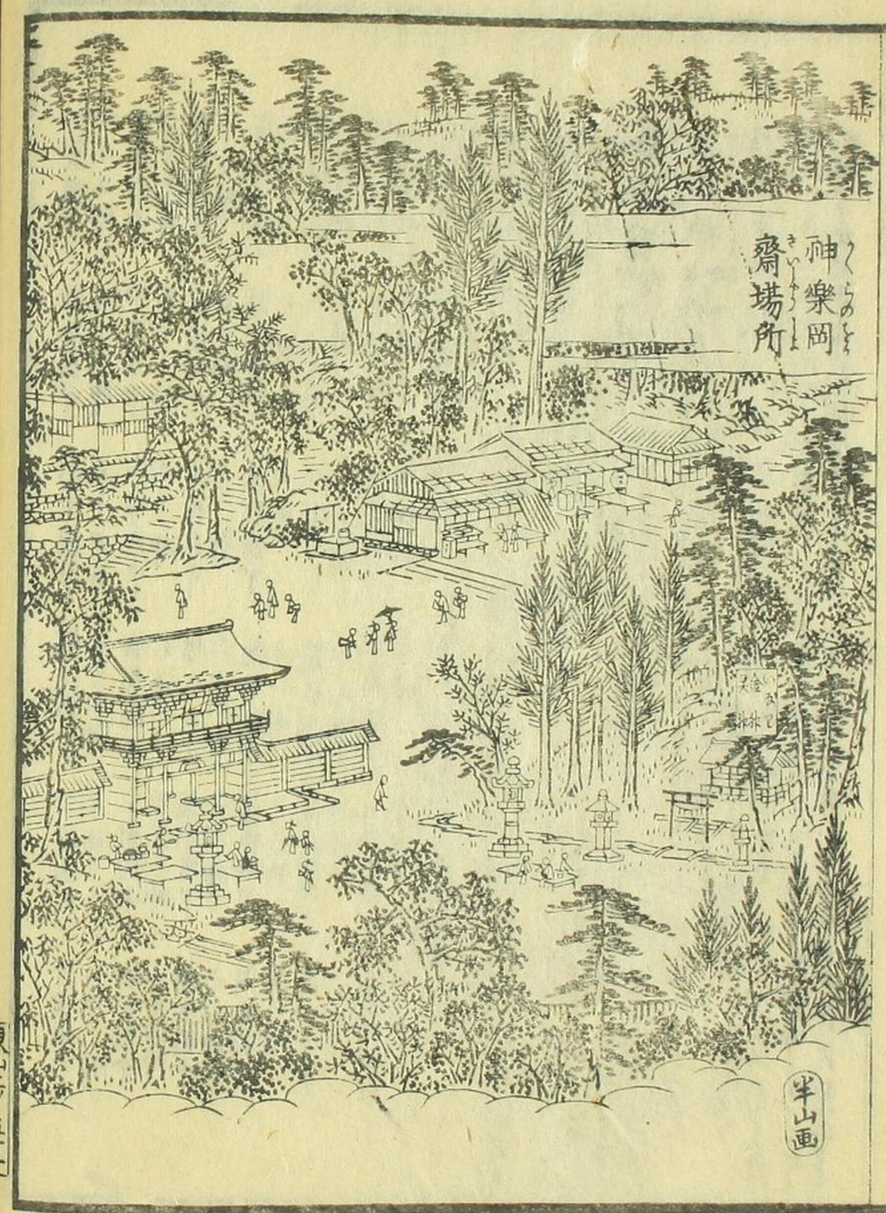
楼門 中門の前にあり南向　額 日本最上 丙太神宮 日上明星水 中門の外搦の東にあり昔此井に星落ちたりと云
一旦沈蓄し水凋むこと無し自ら鉦と鳴ると云

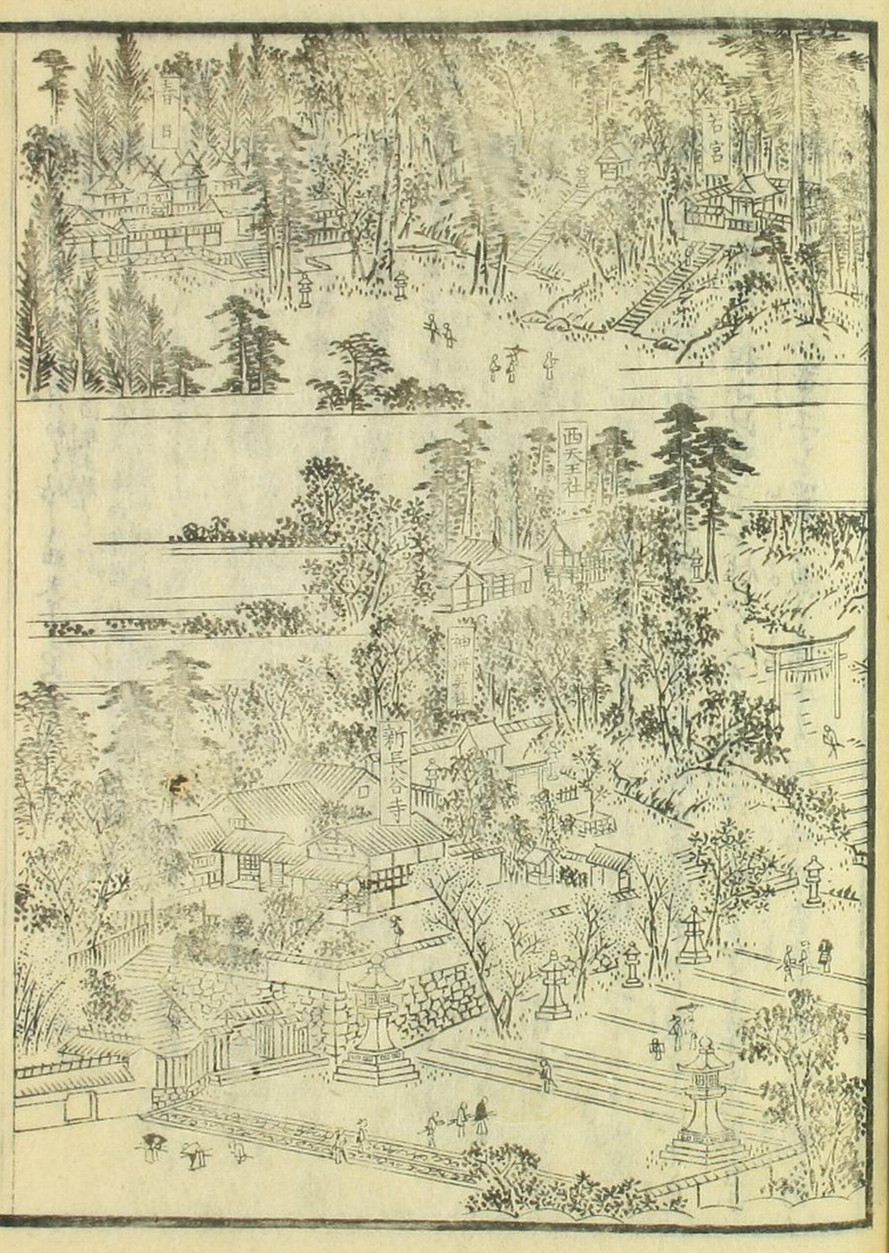
勅使塚 同所搦の南にあり勅使著座の壇なり　日降坂 木瓜社の前本殿の前の道なり傳云
塚なり土俗の口称なり　家なり　昔八日の神降臨有り地なり神系傳云

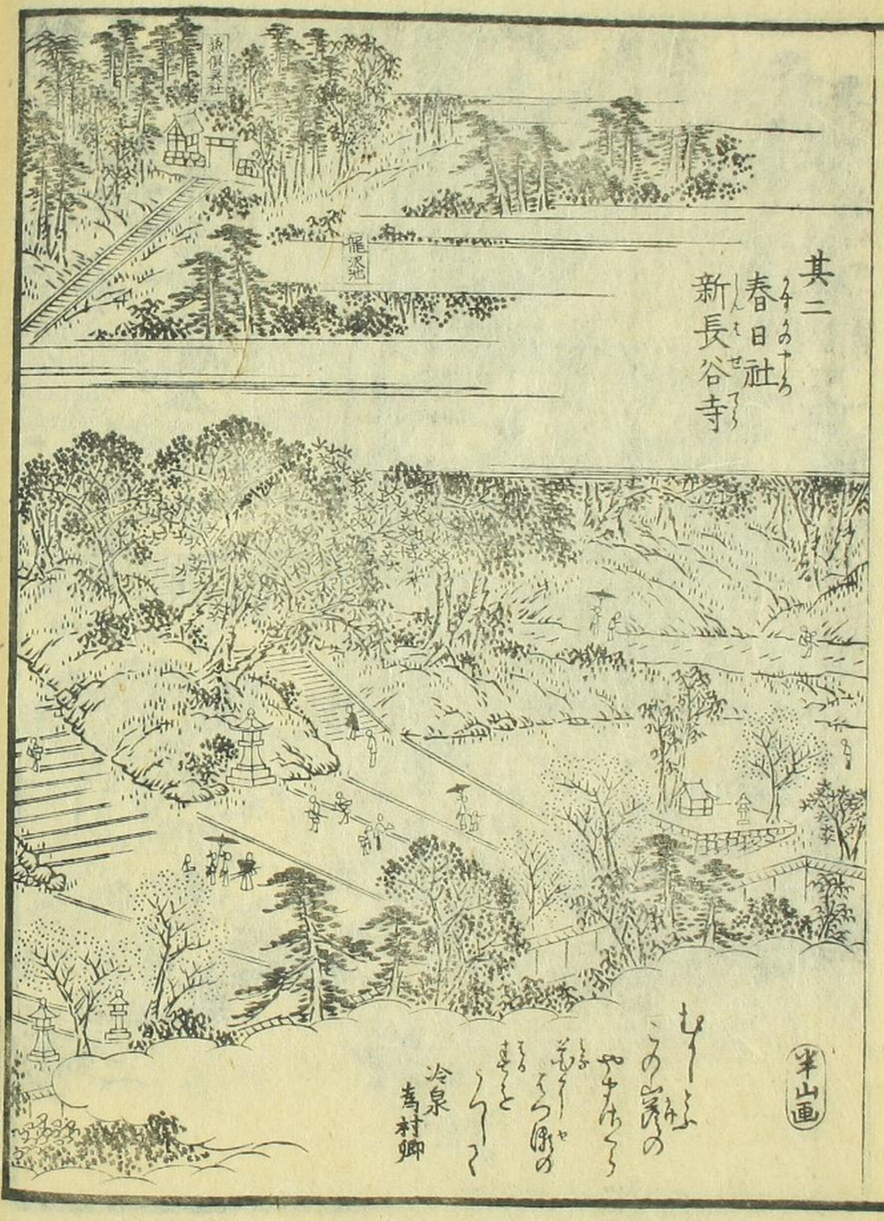
木瓜社 本殿の西下壇の地にあり南向 祇園社中の一座なり例年八月廿四日祭礼あり
神輿一基 長一尺 数本あり 旗の鉾 木瓜大明神と記す

西天王社 日西に隣る南向　祭神素盞烏尊 例祭六月十六日 神輿一基 嶺の鉾 感神院と有当社と西天王と是なり
所以は其昔聖護院杜の東二町ばかりに有又岡崎より日天王社あり則東西にあるを以て
岡崎を東天王と呼び此社を西天王と呼ぶ 然るに故あり此地に然れども


外宮
八神殿
日本国中惣神社
神楽殿
内宮
本社
日本国中惣神社
神楽殿
ゑの山
城まつりの
袷ノ絣
蒼虬


くらを
神樂岡
齋場所
半山画





其二
春日社
新長谷寺

冷泉
寿村卿

尚古名を称し地所ハ西天王なり
聖護院村吉田村等の生土神
神海霊社 同所ふく南向鳥居石柱神海天社の額を掲く
祭る所の天徒門の東南にあり 祝部無後の霊神なり
法輪山と号し弘法大師開基なり 吉田社の辺坐なり
智福院 神明の天徒門の東南にあり 真言宗
以前はあるなり
本尊 虚空蔵菩薩 日本三鼎の天佛なり 秘仏なり 脇士 地蔵尊 不動明王 并に
厨子二重ふ扉あり外に注連なり 弘法大師の像を安ス
宣胤卿記云永正十四年三月一日丙午中納言宣秀卿自早旦行智福院吉田万句連
哥余可遣發句自今日始行云々又云快乗法印 吉田 智福院
新長谷寺 同所の西にあり堂西向 本尊千手観音 立像六尺 脇檀 左地蔵菩薩 右妙見尊星
春日社の神宮寺なり
按ずるに当時安芸国十一面新長谷寺云々 浴陽願礼の第九番なり
開帳に奏詩観音十一面あり古仏を失ひしの又親長卿記云文明十九年九月八日西京
寺説に云新長谷寺ハ春日の社の神宮寺なり山蔭中納言の草創なり 和州長谷寺を移さ
る故に長谷なり 碼碯石を送る則ち大悲の壇下に納めしと云々
当地ハ原中納言山蔭卿の殿宅なり 其始山蔭卿宿願ふかく千手大悲の
像を作らんと欲し和州長谷に詣で祈誓あり観音感應まして童子と化して見
えて斯有て程ふ此童子を伴ひ来り清浄の地を尋ね第宅の東方に
新室を造り童子を置て無比唐土より得て栴檀香木をあらへて観音の

像を作らんと童子一千日こもり何方ともなく去る所
後摂州嶋下郡に寺院を営み此霊像を造立し今の惣持寺是なり
委しく惣持寺の縁起に見えたり 程ふ此地ハ観音霊験の地なりと以て殿舎を轉し
佛閣を長谷寺の本尊の尊容を摸し此に安置し新長谷寺と号なり 三国傳記 抜要
神楽岡の西にあり所の名中に農家建つ一村なり東西十五里二十間南北七丁
三十四間云々 古哥に里野 農山等と詠ず
拾遺 名ふたくさ吉田の墨の杖なれ行くもつきず君が万代 兼盛
夫木 吉田野のきぬるも松はあるとまれ神乗家 読人不知
曰 紀事も吉田の森の蔭なれ光をぞまつ 野宮左大臣
吉田家 吉田山神楽岡西の麓南側にあり家領七百六拾石余
宗源殿 曰館内にあり神事修斎の所なり 夫当家ハ神道卜部の正統也凡神道家ハ中臣
社司上七人下九人家中甲乙列居
卜部の二流元同氏中天津兒屋根命の裔なり中臣祓ハ天中臣氏也
惣卜部中臣藤原ハ一姓なり仲哀天皇の御宇天兒屋根命十一世の孫
雷大臣命亀卜の道ふ達せるの間其賞として始て卜部の姓を賜ふ云々

萩原家　新長谷寺の西にあり家領千石吉田兼治朝臣二男と萩原と称す

神龍院　豊国社の初官なり社廃後改ふ拝任せり　日野の南にあり禅宗南禅寺に属す其始め吉田の社家ト部兼俱の男僧なり九条号に南禅寺に属す尔後此寺を建宮に而神道の護摩と修す

神恩院　日野にあり浄家の禅僧なり一説に兼好法師と寓居なりつゝ此寺院なり　神龍院よりあるべしと言傳なり非なり

吉田神社　右日野の北にあり神楽岡の中央西の禁　社前門の左右廻廊列を西の僧御供所

本殿　南向　四座　武甕槌命　齊主命　天津兒屋根命　姫大神　南都春日社同一

ト部兼右二十二社注云清和帝貞観年中鎮座に中納言山蔭卿始められと

渡し奉る云々　同兼俱記云當社は藤氏の崇敬他に異に依り曩祖兼延勧請に云々

御堂関白御書云奈良京の昔は春日社に氏社に興福寺に氏寺

に平安城の今い吉田社に氏社に法成寺に氏寺に社頭の衰廃

に随て宜く藤門の榮衰を測るべき者は一天安全四海平定殊に當氏の繁昌の

祈禱を抽んぜべき者之を慎て怠る事莫れと云々　長和元年十月十八日神道長左衛門権佐殿云々

新続古　ちゝはゝとゝかゝ四くりの柔を結ぶ絶ぬ吉田の社まつられ　吉田神主　兼熙

千首　程ちかき吉田の宮の神岡さく松風の聲ちかう清　為尹

若宮　社前の東の辺あり　神楽岡神　若宮の北の小祠なり當所の地主神なり　神祭式

祭神南都小同一　日吾霊神山城国神楽岡に坐す

ト部兼倶霊社　日南山城国あり後奈良帝勅号　龍澤池　日野の南にあり傳云南都猿

神龍大明神と賜ふ　澤の池に比べ遠き所

吉田大納言経房卿亭跡　宣胤卿記云神楽岡西禁神龍院門前旧跡云々

又大納言は任に吉田と称に井露寺家の先代なり　伊豆介光房の男右中弁より太宰権帥民部卿を兼なり

民部卿は経房卿吉田堂の色紙形に金星義経十切経品文に

是経卒後法仏室宅東去至一切衆生殺善提心

白ひとつ〜ものの都の法の華ちりて赤い蓮の波の袖　寂蓮

中御門宣胤卿亭古跡　神龍院の北の門前旧跡なり　宣胤卿記云永正元年八月

又云永正十四年七月十二日　廿四日于時居所東山吉田神楽岡西禁神龍院北門前旧跡也

竜院門の内なり云　泰河東墳墓元祖及二親理法墓列祖七代廟云々墓所神

大永五年薨に年八十四　宣胤卿は後一位権大納言明豊卿子後一位権大納言に叙任に

代〜のあとを残に林の法もれば跡山本に住もるべし　宣胤卿

兼好法師菴室古跡　今詳なるべし一説に神龍院の内に任せり　或は神龍院に

師ハト部兼顕の子なり　博覧強識に和哥に世に吉田の兼好と称に　高尉

運を以て和哥の四天王と称に　和哥に和文に巧なり当時兼好頓阿浄弁慶

帝明帝山　左兵衛佐に任に　出家の後横川に登り

深く影迹を匿に師に修学院に入り名の兼好を以て法号とし

迷のあり世の雅詩に常に双丘の頓阿と方外の友なり和哥を以て米銭を乞ひ文

に日心友い得難し独燈下に坐して書を読古人を友

楽しとれよりの過ぎなくなりと好みて老荘の書を読む既ふ徒然草を著はし
心緒を述ふ其名世に高し又高師直の為に艷書を書しこふ説あり然れども其実否
を知らざるなり師の節操を見んと欲し一美人の相謀りて一夏あり紀元改謂て曰
兼好以師直為友且筆其艷書若物我相応然及遇嬉女之媚惑則秋霜烈
日凛然不可優也可謂和而介者矣或曰可学焉乎曰柳下恵者百世之師也
然其迹或不可学焉無兼好之介而学兼好之和則其不失者幾希矣

弥勒堂 吉田村の西南にあり石仏の弥勒の像なり又阿弥陀仏地蔵
園大暦元年二月三日兼好在伊州而罹病同十八日辛巳墓於田井荘云あり
朝廷より使を賜ふ尊の石像を安ず古昔の日弥勒の像ハ〳〵〳〵此所の土中より堀出るのなりとそ
尊く賜物あり支も見えず

弥勒川 日所の傍にあり弥勒堂の西の田
尤斯水ハ井出より出るものなり故に斯号ふ

月輪川 日所の西にあり傳云月輪兼実公別荘なりの傍にあり故に斯号ふ弥勒堂の西の田
の字を月輪と云ふ是別荘の旧跡なり親鸞聖人の居住ありし地なり
言つたり聖人旧跡の一貫たるんと説あり聖護院の門徒月輪院と云る寺ありへ此あり
故此院の名ふよりて川の号とせるなり又川の名ふよりて院の号とせるなり

愛宕墓 今詳ならず或人應永年間写水洛外図に数て月輪川の東に有今田中と云辺なり云
按ずるに吉田山東北の田地字冢の廻と称る所あり此地なるや猶可考

諸陵式云贈正一位源氏清和太上天皇外祖母在山城國愛宕郡兆域
東二町南一町西一町五段守戸一烟
文徳實録云齊衡三年六月丙申正三位源朝臣潔姫薨嵯峨太上天皇之女也母當麻氏
太政大臣良房室 清和大后母 擇加樂岡白河地而為葬地仁明帝姉琵琶と能に良房公に先たち薨ぬり

後愛宕墓 今詳ならず山城志に八一乗寺村にあり字深殿と記に然るべし
古跡田中村の東に有べし日書愛宕墓と是なり哉

諸陵式云太政大臣贈正一位美濃公藤原朝臣在山城國愛宕郡
守戸一烟 三代實録云貞観十四年藤原朝臣良房薨封之為美
濃公諡曰忠仁春秋六十九藤氏擅政始也

古今集
ちの海ゆ河ハ多くの名ありとも素性
はきの木わき切ていまゝちきみを白川のあらふ
おろかなる涙ぞつきもしらかわの

白河陵 今詳ならず山州名跡志に此所今白河人家の南に銀閣寺の乾に中る故
謂意ハ北の限白河と此流れ東より西へ流れ来て南へ流る此河を北
小見る時ハ今ハ上所決
せり今ハ字だるなり

諸陵式云太皇太后藤原氏在山城國愛宕郡上栗田郷陵戸三烟
四至東限勝隆寺東谷南限自御在所南去十一丈西限贈正一位
源氏墓北北限白河云云此陵ハ藤原氏諱明子良房公女清和天皇の御母染殿の后と称
月輪川の西あり古へ徳大寺実定卿の姉前后宮此辺に在せり大宮殿と称し亦後
近衛河原 尼寺なり三條の北東洞院則ち今の曇華院あり通玄寺と号しる
平家物語云故近衛院后太皇大后宮と申せしハ大炊御門右大臣公能公

の御女なり光帝ふかくれ奉給ひ後ハ近衛河原御所まで移奉給ひ云々

牛宮　弥勒堂の北二町ばかりふかあり杜の中ふかく成ハ野の神なり牛を守護する神なりと

泉殿　牛の宮の北一町ばかりふかあり今ハ方三間ばかり是ハ庭前の池の趾なりとぞ
此所ハ園大納言の載る後二條帝の仙宮白河の泉殿の古跡なりとぞ

一本松　右同所　安居ところの像これなりと云

二本松　同所の北ありいつれも吉田の春日の社あり古跡なりとぞ吉田の社家の説ハ云々
春日社なりとぞ此所ハ文明年間神楽岡の禁ハ云々

身隠森　同所　ありて康保元年十月村上皇后藤原安子を神楽岡の西北ハ葬ハ
日本紀略ハ見えたり此所なりべし後三条院の火葬所と説あれども當られ

猫塚　同所の田畠の中ハ代々貴人の墓の地なり猫塚と云ハ後世誤つ
納言藤原清隆卿の塚なり　猫塚と称ハ遠ハ是勸修寺家の祖猫間中

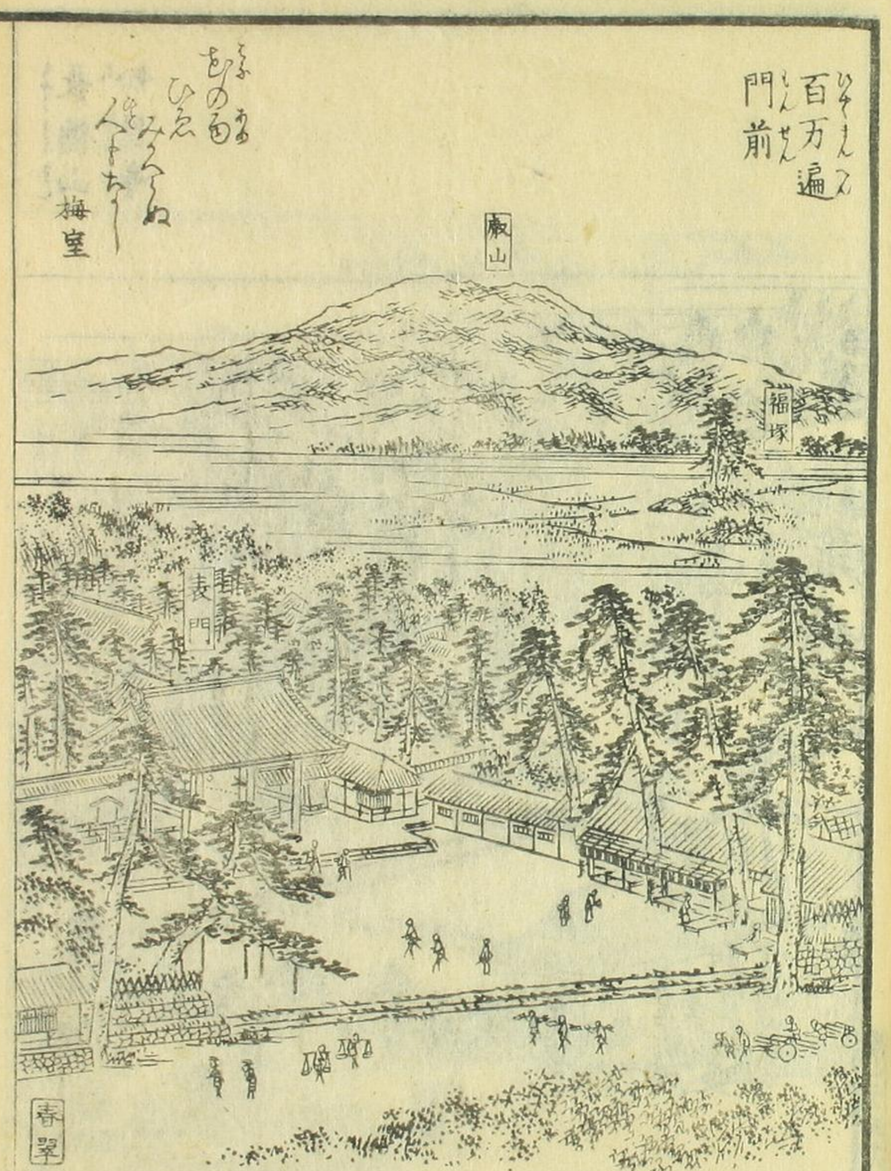
田中里　百万遍の傷也とハ古文書云蓑倉御の内田中の里と云
二水記云享禄三年十二月廿九日東泉出張田中里悉焼拂ふ

穂井田忠友

野河御所　今其跡詳ならず　平家物語ハ建禮門院六月廿一日吉田の辺なる野河の
御所へ入せ給ふ此御所ハ申ハ花山法皇の世をのがれ給ひし時造進せられし云々

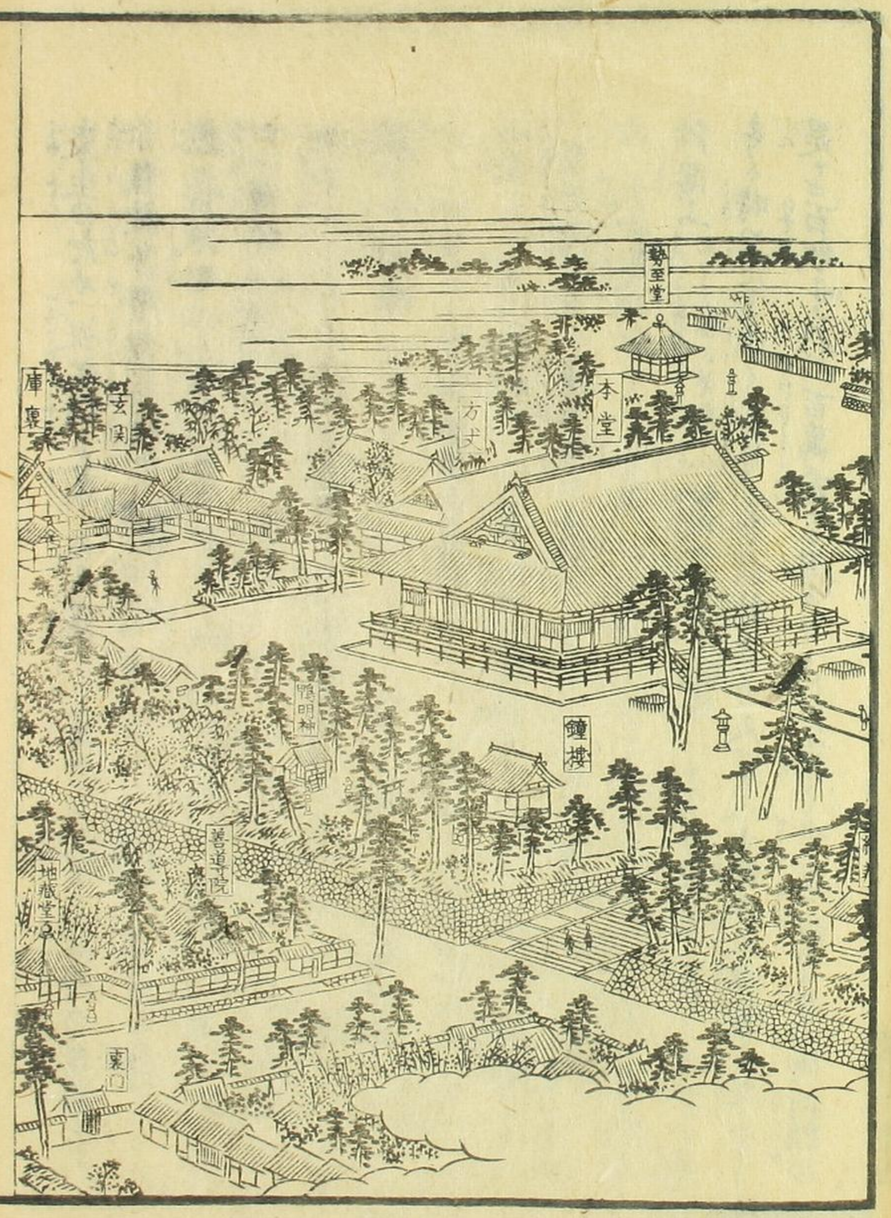
沸々　百万遍の西門前の畠の字なり此地ハ地中より水涌出ふかくと
故ハ土人の野号なりと云ふ一説ハ三躰仏の石地蔵始あり所なりと云ふ

長徳山知恩寺　百万遍と云ふ北白川の地あり浄土宗鎮西流四箇の本寺なり
本堂　南向　元祖圓光大師　寺領三十石　座像二尺四五寸
本師堂　本堂の前東傍にあり西向　釋迦牟尼佛　座像七尺許此像頭ハ自然の出現ハ
同脇檀　南方　毘沙門天王　像五尺許　地藏菩薩　立像四尺余　余ハ慈覚大師の作
同檀　北方　阿弥陀佛　立像四尺許　不動尊　立像四尺余　弘法大師作　智證大師作
額知恩寺　竪額　後奈良院宸翰　観音堂　釋迦堂の北にあり白衣観音と安置ス
勢至堂　本堂の前西傍にあり　勢至菩薩　座像一尺余　運慶の作　勢　勢　立像二尺　勢至　立像二尺　二十五菩薩　各二尺余
鎮守社　本堂の西傍にあり南向　鴨明神を祭る　経碑　堂前の東傍にあり阿弥陀経を刻ス筑前国善導寺の
方丈　本堂の後ハ南向額方丈の一字ハ後奈良院の勅筆なり　鐘楼　堂前西傍にあり
安樂院　本堂の寅卯の方ハ本尊阿弥陀佛　立像八尺許
善導院　本堂の西北側にあり本尊善導大師ハ自作　立像二尺許此像ハ東大寺
後東坊唐土より持来りし所の尊像なり　當院ハ甚だしき京師の上熱裏町ハ
あり中頃當知恩寺の境内にうつり開基ハ等譽上人なり
又善導大師自作の地藏尊を安置ス
地藏堂　西門の内にあり南向本尊延命地藏尊立像五尺許春日佛師の作
脇士左不動右毘沙門立像三尺ばかり共ハ春日の作なり



法然上人塔　寺境ふあり中央元祖上人の塔あり〳〵傍に第二世勢観坊源智上人の塔あり
其外第三世の住職より三十九世の上人ふ至るまでの塔左右ふあり六條局の
塔真如院蓮生と号し後西院の女房ゆ〳〵六條家の女なり八條宮の母公なり小一條局の塔
栄雲院と号し後光明院の局ゆ〳〵女一宮の母公なり
此余中御門家の塔日野家の塔廣橋家の塔なども〳〵貴族の塔多〳〵又慶長九年庚子の
冬伏見城ふて討死せし人々鳥居彦左衛門尉元忠佐野肥後守等の墓所あり

抑當寺ハ往昔慈覚大師の草創ゆ〳〵賀茂下上社の法樂修法の寺なり
始め神宮寺と号し只今出川の上相国寺の地なり慈覚大師彫刻の歌迦の像と安
義満公相国寺草創の時當寺を油小路一條の北ふ移し又其後永徳三年鹿苑院相国
土御門の南ふ移し寛文二年又今の地ふ轉し後豊臣秀吉公の時京極
當寺其始ハ天台宗たり嘗て法然上人賀茂下上を信敬あり或時明神
上人の枕上ふ来て告ていハく神宮寺の釋迦佛ハ諸人吾神相となり〳〵諸願を
祈る吾その奸直を鑑て霊應を施さるべ今より寺を以て汝ふ附与ス
此ふ於て専修念佛の立義を説い海内其化ふ順ぜ〳〵吾亦之を擁護せんと
加之社司の數輩ゆ此寺を以て上人ふ寄附せ〳〵の霊夢の告有り程ふ
神官驚き謹て寺と上人ふ与ふ上人今又神勅ふまかせ此ふ住職〳〵遂ふ
専修の法要を誘て天下ふ一宗を發興ス又或時鴨の明神懇望有て末世


勢至堂
本堂
方丈
玄関
庫裏
鐘楼
唱明神
地蔵堂
東門

長徳山
知恩寺
釋迦堂
石経
手洗
阿弥陀堂
表門
春翠

衆生のため一枚起請と書しめ給へり是より當寺を改めて念佛の道場とし
今後徒身勢觀房源智（備中守平師盛の子なり小松内府重盛公の孫なり無双の智者と言傳ふ）に當寺を讓とうふ
然れば源智上人は當山第二世なり（時仁元年十二月十一日此寺に於て寂に臨終寺號と現に傳記す）第六世智恵
如一國師（後醍醐帝御帰依の故に国師号を賜る）此上人に至て法脉嫡々相兼に時に後醍醐帝の
御宇元弘元年の秋日本國中大に疫屬流行し民多く死に帝憐み給ひ
諸の祈禱ありとへども更に験なし其選命に洩たる者獨當宗なり此に
於て浄家の鎮護國家の修法あるべきを聞召され當寺第八世善阿上人
に命じて是を持念せしむ善阿更に餘行なく七日を限て念佛せる事
一百万遍に至る疫病忽ちに退く天下一同に安堵に（此時修せる秀句大珠数今に存せり）
帝大に感あるべく百萬遍の號を賜る又弘法大師筆跡六字の名号
を賜ふ（其字畫のあり方皆劒なり利劒の名号と称に是則ち利劒即是弥陀号の謂歟）夫より當寺に於て此法を修
せる時に是を以て本尊とし結衆十人一千八十珠の大珠數を廻らし
是を百般せれば一百萬遍を得るなり依て世上災疫ある毎に御祈願の

勅命を受たる事なり又毎月十六日天下泰平の祈念これを以て修し且
當寺住職紫衣香衣の綸旨御祈願寺の綸旨數通并に御教書等あり
後花園院の文安五年數日大に地震に此時御祈願の綸旨に云

當寺宰　御祈願所專浄土一宗之弘通奉祈
朝家千載之榮運者　天氣如此仍執達如件

文安五年五月二十一日　左中辨冬房

知恩寺長老大誉上人御房

（山城名跡志云當寺始めの一名賀茂川原屋と法然傳に書り明らかなる故なり故に其故は當寺の旧地河原にあり尤河原屋と書り何を寺院と称し河原屋と称し又鴨の舟院伊勢の舟宮いふべし其故は當寺の旧地河原にあり尤河原屋と書り何を寺院と称し河原屋と称し又鴨の舟院伊勢の舟宮
ふ忌詞あり寺院を称して屋敷と称し又鴨の河原に神書に間々寺院を称して石舎と書り又鴨の河原に名ふなり
宮寺なり名ふ神職家鴨の瓦舎と書り故云々
河原屋と書りの故云々）

松蔭硯（當寺付室の硯一なり此硯は趙州の宋玉平相国清盛に賜る所なり然
後重衡卿に賜り受られる此硯は源氏の方に帰れり硯は紫石に作り
法然上人を招請して導師に請ぜり
硯の竪七寸三分横四寸八分厚一寸三歩海月形雲彫上に古文字彫入なり
右硯の記南禅寺月舟和尚拝禄二年に作る一巻銘の序に出
後柏原院此硯御覧の時内侍の報書一通あり）

幻雲稿 松蔭硯銘序 云 昔壽永三年春平氏一門城守于構州一谷源判官義経奉勅攻之平氏敗績重衡見生擒嘆蕉沫之命在旦夕而招黒谷法然房源空為授戒師聞浄土法曰贈一枚硯表檀賜旦曰此硯吾先君清盛相國曾齋黄金若干斤奉献趙宋天子天顔有喜輙賜此硯先君秘為至寶付予小子異日置師座右染麝煤揮兎頭書弥陀聖號則吾本願也云云法然没後此硯藏於知恩寺寺在今出川此即賀茂神宮寺也安慈覺大師彫刻丈六釋迦像故名釋迦堂又呼賀茂河原屋司神職者延法然居焉後平氏小松之内府重盛之孫勢観房源智為主改云知恩寺源智備中守師盛子也此硯平氏累世奇玩也源智護以至末孫鹿苑相公欲建相國寺於彼地而移此寺置小河西也應仁兵乱之初寺既罹災硯亦失而不知所在兵江州篠原正琳八一箇野僧也自何得之被蓋嚢藏歴歳久兵老病相逼急于修冥福大永二年壬午孟春二十八日托其心友寄附知恩寺結來生緣翌日逝兵卒

享禄二年己丑

前南禪退耕月舟叟壽桂書

北白河殿 百万遍ヶ卯辰の間二町ばかり其古跡なりと云 此所造営の年記詳ならず

後二條院陵 右日所の路傍の北にあり帝陵記曰後二條帝陵山城国愛宕郡北白河村畑中塚と云

紹運録云後二條院徳治三年八月廿五日崩 春秋廿四 葬北白河殿

雍州府志曰福塚八神楽岡の西北知恩寺の東にあり按るに勅修寺家一代五條大納言国綱卿家甚富り曾て五條の内裏を造る又治美四年平相国清盛公の勧めなり都を摂州福原に遷す平家物語に見えたれば世人福家と称するものなるべしと云々大福長者なり平家物語に見えたれば世人福家と称するものなるべしと云々山州名跡志云此地北白川領なり其四境は西は百万遍の西の門前より南は北白河に至る往還道より北は田中領より東は中頃陵の巡り四方に常に水あり是昔あり福家の塚なり昔より此塚に三十年前迄隣吉田の内に住るものあり毎歳塚の上に葫蘆を植ゑ盛夏に至りて実を結ぶ性猛烈なれば強機なり毎歳塚の上に葫蘆を植ゑ盛夏に至りて実を結ぶ性猛烈なれば強機なり彼者これを取へしと家に入れば家に入れば発熱闇憑して死に至る中に小蛇あり首を上げ口を開き強機覚えず身毛よだつ

二軀石佛 陵の東白河道の左傍にあり二体共に坐像中に四尺許甚古作なり希代の大佛なり合運図云宮徳三年三月北白川の佛像動くと云ふ若此像なり希代の手傳に云ふ聚楽城に此像なり然るに此像夜々声を発して白川へ返せと鳴動せられしなり元の地へ移されしなり其時車を造つて是を挽たり其車四十年前まで朽残有り山州名跡志に見えたり

白河 委しく北白河と云ふべし所の名なり銀閣寺の北にあり是則河より西なる民家なり南北に走つ古哥に多く里河花松河八里の中を東より西へなる民家なり南北に走つ古哥に多く里河花松

卯花滝　茅を詠ぜり

土人云昔ハ白河南禅寺の北より西へ流れ三條の北ゆく鴨川へ流れ合ふ故ゆゑ
限アリ北の地を北白河と号ひ南の地を南白河と号ひ
一説ニ云ハ白河と号ひる地ハ浄土寺村の北今の白河村より鴨河の東を限り九條の辺ふ
いたるまで凡て白河と曰へり
尚白川の名所あまた有ども是ハ次篇洛北の部ふ出ぬを以て茲ふ畧ス

拾遺愚草　春ゆくぞ　定家

玉吟　波の音ハ　家隆

風吹ばまつの波もまづ　景樹

くれられば　仝

上栗田　郷名なり凡白河の辺より吉田黒谷の辺より迄上栗田郷と称ぬ見て

栗田山荘　左大臣在衡公別業の有一所なり楚王於尚蘭會あり今其跡存ぬと云々

拾芥抄云東明寺神楽岡北左大臣在衡の別業尚蘭會あり栗田殿云云

勅撰名所和歌抄云栗田殿神楽岡　在衡卿宅山蔭中納言旧跡也

著聞集ふ云尚蘭會ハ唐の會昌五年三月廿三日白楽天履道坊ふ始めて於て給ひ
々々我朝ふハ貞観十九年三月十八日大納言年名卿小野の山荘ふ始て行れ々々又安和
二年三月十三日大納言在衡卿栗田の山荘ふ行れ其後天慶元年三月廿二日大納言
宗忠卿白河の山荘ふ行れ

本朝文粋　暮春藤亜相山荘尚蘭會詩序　菅三品　東山別業有水有花水可與人心斟不竭

花欲與我道久而弥芳云云

浄土寺古蹟　此寺今の浄土寺村ふ在ぬ

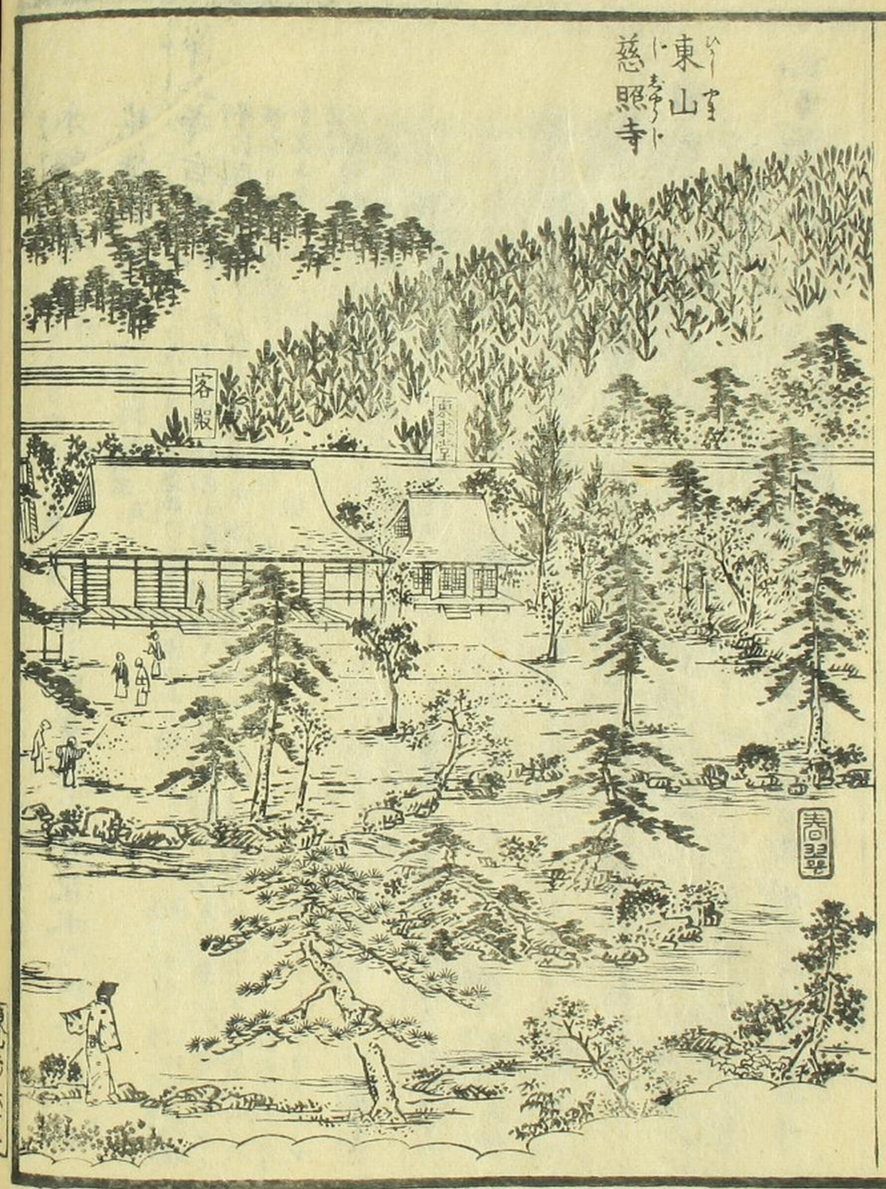
今寺ハ絶て村名ふ存て足利六代将軍義教公ふ出家ふ浄土寺殿と
号ひ既ふ其寺の鎮守ふ山王十禅師と衡請ひ其旧地今田の字ふ
所なり洛陽相国寺の西ふ迄ひ今室町今出川の地築山町其
名ふ今村中ふ残ぬ生土神ふ尊信ひ又云此寺恵慶法師の和尚の庵ふ作る浄土寺是
土人の曰浄土寺の旧跡ハ今の銀閣寺の地やつぱ非ス
山城名勝志云今草堂一宇あり弥陀を安ひ是當寺の本尊ふ云山州名跡志云此村の総堂の
本尊阿弥陀佛ハ曼則慈照院公の持尊ふ云云有右同佛ふ未考

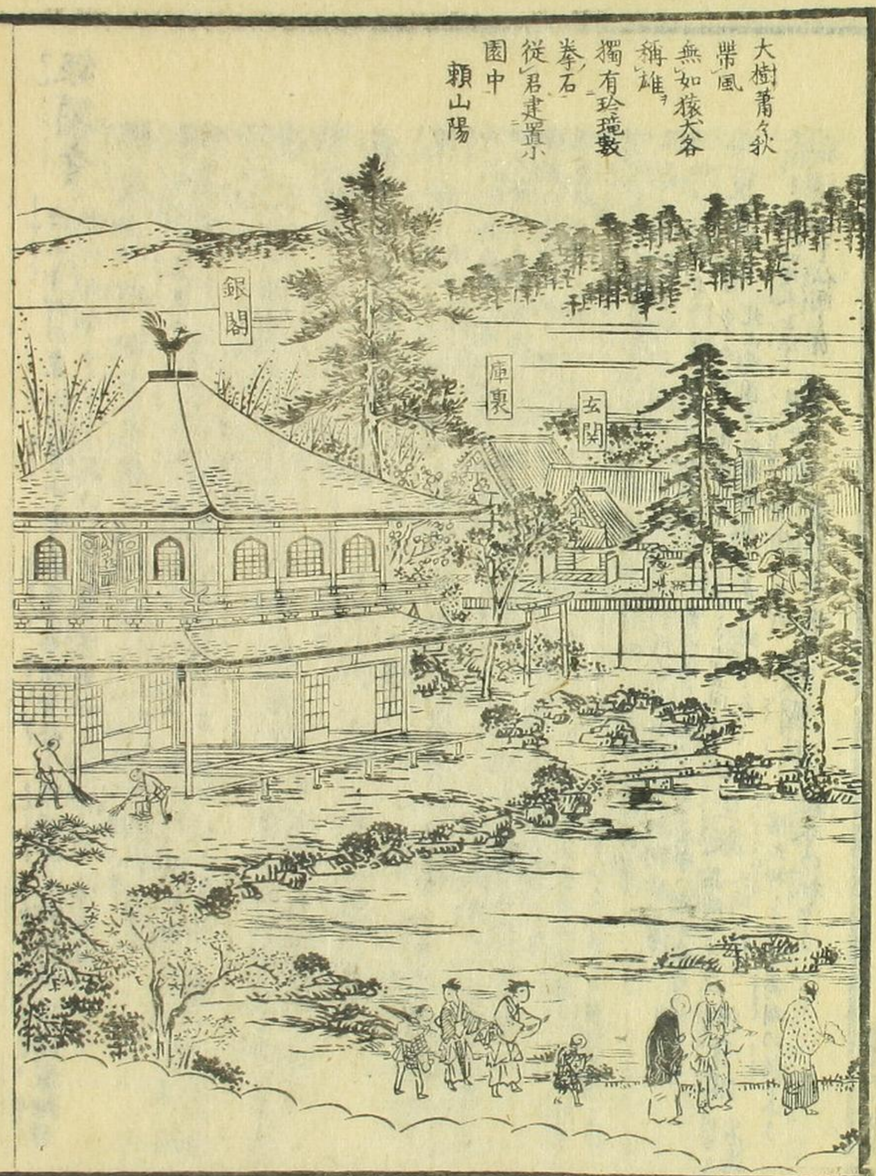
今昔物語云明救ハ延昌僧正の弟子ふ止支ふ成上り僧正まで成ぬ

浄土寺の僧正言々云々又山槐記ふ安元元年八月十一日建春門院密々相
摸守業房ヶ浄土寺の御幸あり云云百練抄ふ寿永元年十二月四日院の女房丹
後局浄土寺の堂供養ヲ云云又大江隆兼卿浄土寺仙窟の即事詩無題詩ふ見えり

十禅師社　同村銀閣寺の門前ふあり祭神山王十禅師是右ふ云古浄土寺の鎮守ふ
今當村の生土神ふ社鳥居南向ふ八所明神の社あり右村中ふ十禅師と
云る田園の字ふ残ぬ是此社の旧跡なり其余若宮の馬場佛眼寺堂の後ふ
小字の町地あり

西方院旧跡　右神社の北ふ今林あり天台座主記云後一條院御宇寛弘四年
十二月九日院源僧正任座主位西方院云云


東山慈照寺
客殿
東求堂


大樹蕭条秋
帶風
無如猿太谷
稱雄
獨有玲瓏數
拳石
從君建置小
園中
頼山陽
銀閣
庫裏
玄関

銀閣寺　浄土寺村の東山の麓にあり本号慈照寺俗に銀閣寺と称し禅宗済家相国寺の末寺なり十刹の一なり夢窓国師を開祖とし寺領三十五石

佛殿　南向釋迦牟尼佛　座像二尺許中正院日護の作

右の方丈の客殿にあり中の間に海北友雪の仙人畫東の間に道邈の山水なり西の間に山水なり狩野隆也の筆襖に土佐光興屏風に相阿弥の筆芦と蓮に金銀の砂子を撒たり希代の名筆なり

東求堂　右方丈の東にあり足利本尊觀世音　立像一尺許丙子に蓮華をさぐ　坐像実に阿弥陀佛の殿なり　義政公の持佛堂なり

慈照院義政公像　束髪に法服を著し丙手を重ねて倚子に座す　長三尺四五寸許木像なり

尊牌　幅二寸四五分　銘云慈照院殿准三宮喜山壽位　御自筆倚子の下に安置

中央花鳥の画は東山殿の同明相阿弥の筆上段に水引は漉禁の印金なり右渡りに世に稀なる奇物なり襖障子白張墨がきの竹彩色の若松は同相阿弥の筆

佛檀の後北の間の壁白張なり枯木小鳥の墨画は狩野永納の筆

同東の茶湯の間は四畳半なり東山殿の物数奇なり茶亭四畳半の盥鱠なりとぞ高貴の貴客常に集會あり茶道となり和漢の奇物を愛し是を後世に傳ふ

時代の物なり遠棚の張付の梅の画は狩野古法眼元信の筆

帳基の腰障子梨基書画の図は狩野永納丙腋の蘭水仙は相阿弥の筆

日乾の間に其人なる釈迦の立像迦葉阿難の像と安置せり今は他に移せり聞也

二重高閣　東求堂と角違ひ去る仙五間詩　心空殿　高閣の上さま三間四面こ　潮音閣　同下と北山鹿園寺の金閣に準ず是を銀閣と名く　三間半南北四間半を以て巖間と作り仏間に

觀世音　座像二尺許巖間の内に安置　護國廟　八幡大神を祭る高閣の傍にあり鎮守の社なり

宣胤卿記云東山慈照寺鎮守額平岡八幡の額を写し候へと室町殿仰せて故の實久卿書三字八幡宮云云

分界橋　閣の前に　迎仙橋　池の中嶋に架す　濯錦橋　共に池の滝の流れ　臥雲橋　共に池の　洗月泉　巽の方に　龍脊橋　仙袖橋　仙桂橋　共に東求堂の前にあり　落照岡　池の向にあり　向月臺　銀沙灘　客殿の前に白砂を敷く　落月を惜むと云　細川石　畠山石　山名石　共に管領職なり　大内石　周防の大内なり　浮石座禅石　共に池中に　龍蟠石　蹲虎石　臥牛石　伏虎石　點頭石　布袋石　天柱峯　四雁峯　香爐峯　共に其石の形に　北斗石　落星石　壽星石　濯纓石　謝公塢　共に故事を以て名く　爛柯石　鉤月臺　仙人洲　白鶴嶋　臨湖臺　仙草壇　共に其故事あり　都て當山は足利八代將軍義政公の別莊東山殿なり茶道相阿弥台命を蒙りて造り所なり山水の法は四時の壮観足らざる事なし未代庭造の軌範とす　洞庭西湖も掌に握る松嶋象潟も眼前にあり壺中に山川を縮め一粒の粟中に日月を蔵す神仙の術有とぞ見えたり　御茶水　東求堂の北にあり沸泉の流れ東求堂に通ずなり前相国寺蕉中禅師碑を建る其他林泉奇妙を尽す

山州名跡志云是ハ先義満公北山の山荘ハ金閣を造る是ハ准ハ此ハ閣を建
其規模ハ然ハ銀閣ハ泊を慕ハ義政公夢ハ給ハ勧ハ
これを見顕ハ不審ハ茶亭四畳半の濫觴ハ云云又同書云銀閣寺の四畳半ハ慈照院公
の制作ハ茶亭ハ云云其時其所ハ挂物立花ハ茶亭の時其列座の客頂ハ器
品を云ハ宿門主堪家清花堂上の面々又高臣を招ハ時ハ山名細川武衛等の
人も共所ハ供ハ公ハ吹聴ハ座ハたまハらハや其往昔を観ハ誰ハ感情を生
せハハん哉
ハ云云

太平ノ時節守成難ニ豈ニ科ハ兵戈起宴安
兵戈起宴安　太宰純

両腋風生銀閣上憐ム君ヲ盡日倚ニ闌干ニ

寂寞将軍ノ廟無邊草木肥ユ
苔深ク過客少ク松卧ス古人非ス
流水幾時カ盡ク行雲何ノ処カ帰ル
長嗟ス山路暮幽鳥傍テ吾ニ飛

那波方

相國山荘擬ス帝家茶香韻事屬ス豪奢
雕甍藻井銀ヲ爲ル閣ト錦石朱欄玉ヲ作ル沙ト
興廢當年蕉覆鹿招提今日柳藏鴉
凄涼不ニ獨前朝跡禅室モ亦悲落照斜

江邨綬

吉田敬ハ云人銀閣ハ集芳軒ハ茶湯ハ時

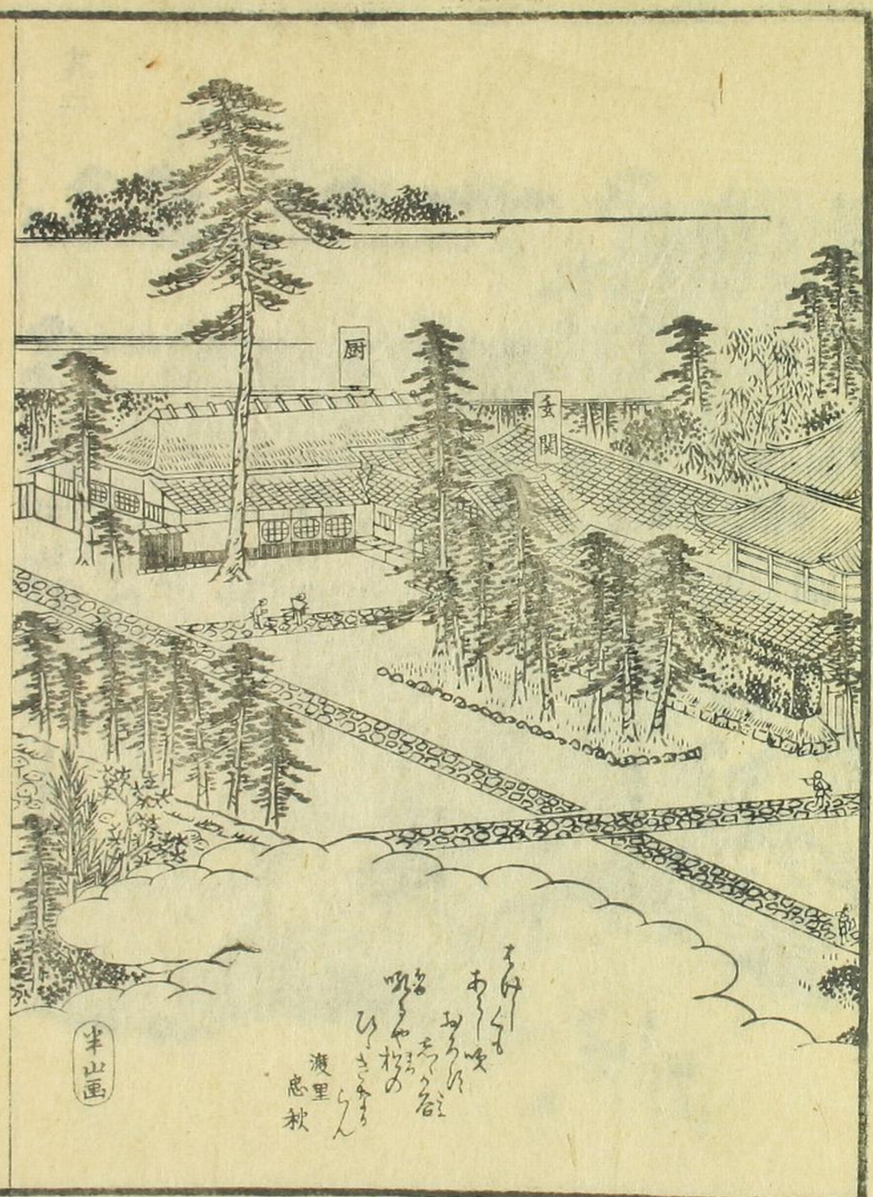
石も本も時代の苔やあるらん

待山の苔ハ

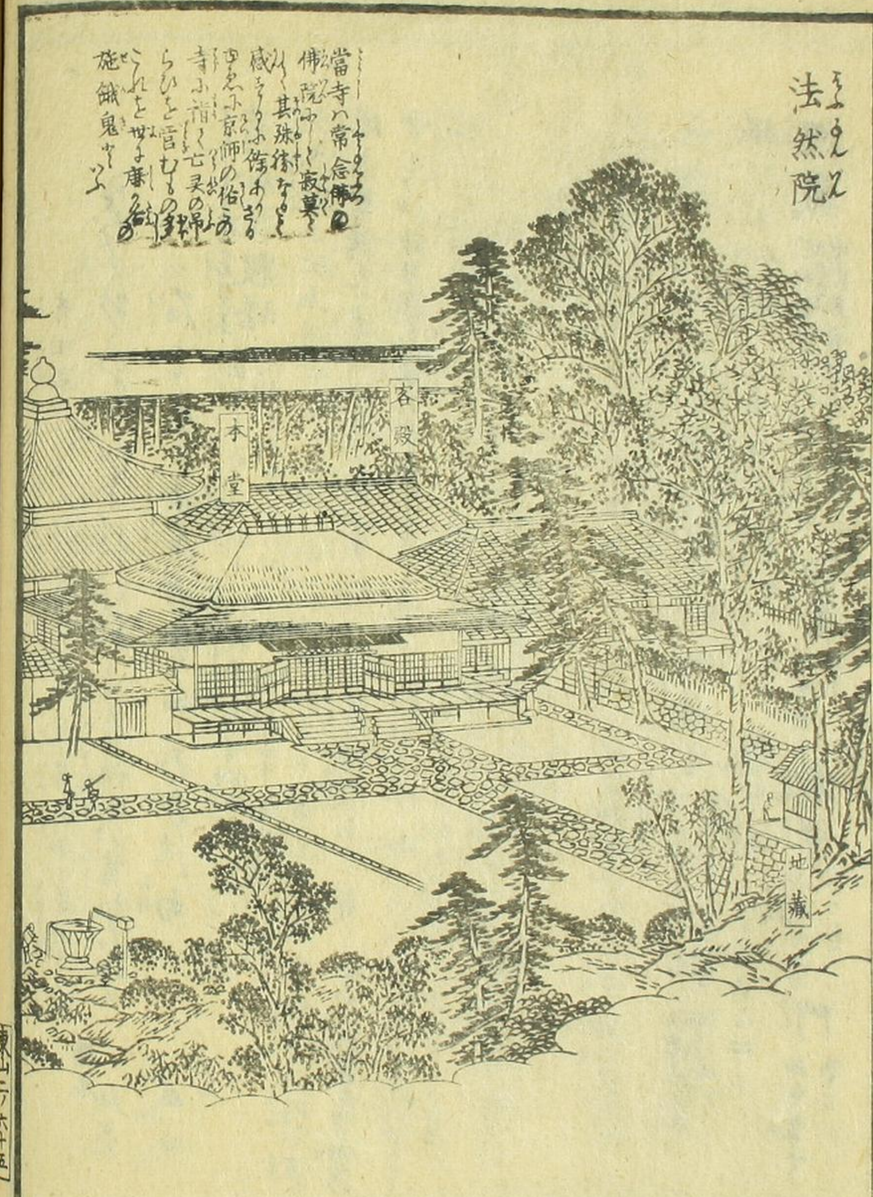
橋本経亮

西吟

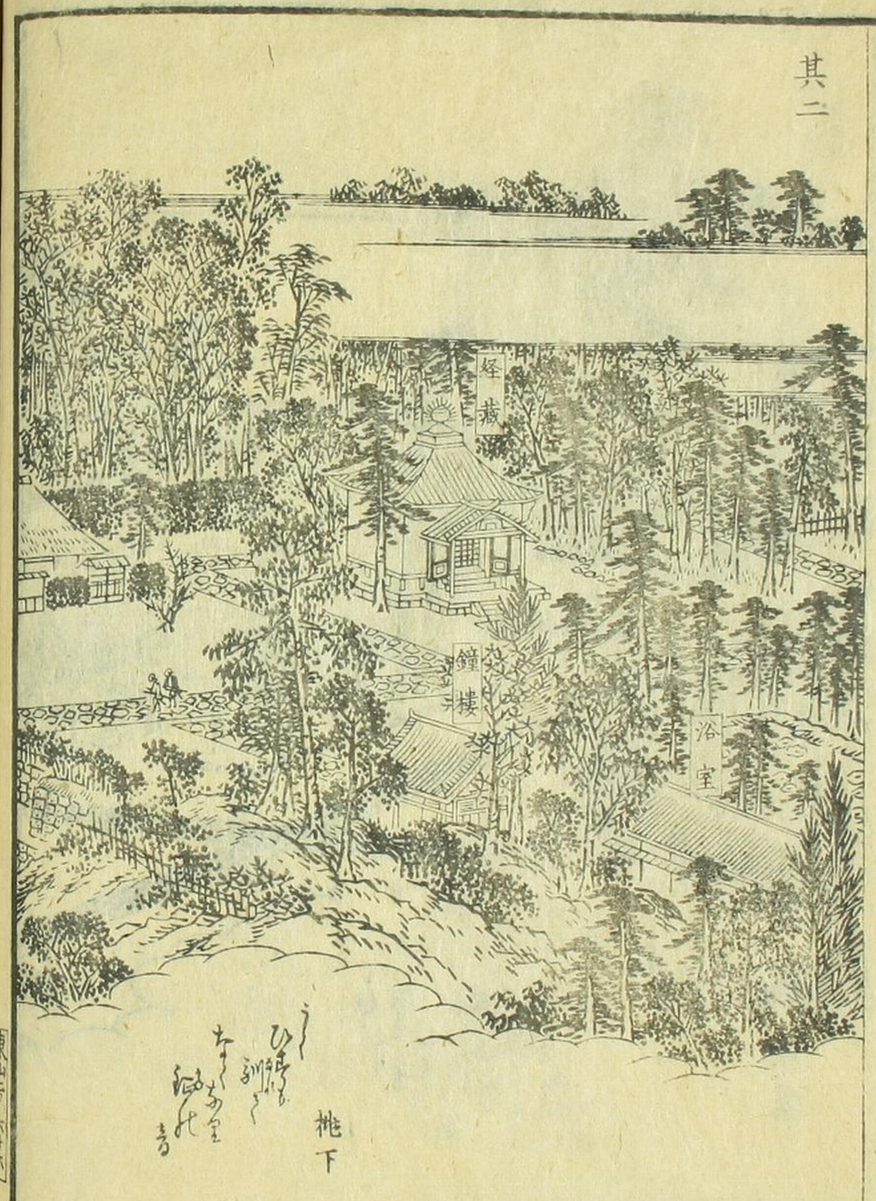
萬松院殿塔　当寺ハ足利十代将軍義晴公の墓
天文十九年五月四日薨ス寿齢四十道照禅山と号ス
宍太記ハ云五月廿一日ハ御葬礼の事ハ云東山の禁慈照寺の内ハ葬
場の普請を出ス代々の御葬礼ハ北山等持院ハ有ハ今乱ニ成る世の
中ニ成ル故日頃入城の御夏を御心ハ掛ケられ御ハ葬ハ
城山の禁ハ葬ハ銀閣寺の卯花の間九ハ町ハ有ハ知意城ハ臭ハ出ル
慈照寺山城　大永十八年五月七日法然院義澄公ハ城ハ移ル
辨慶屋敷　康ケ谷村ハ有ハ法然院ハ
善氣山法然院　寺領三十石元禄十六年ハ常念仏の寺ハ
本堂　東向　阿弥陀佛　座像五尺許　地蔵堂　佛殿の前西ハ向ハ立像六尺許の地蔵尊を安ハ
佛足石　地蔵尊の善氣水　客殿の庭前ハ清泉ハ甘味ハ
鎮守祠　日上稲荷の神を
経藏　門内の西側ハ釈迦仏多門天韋駄天を安ハ
浴室　日東側ハ
鐘楼　浴室の上ハ
門　南向董ハ方ハ



法然院



表門
半山画


其二
経藏
鐘楼
浴室
桃下

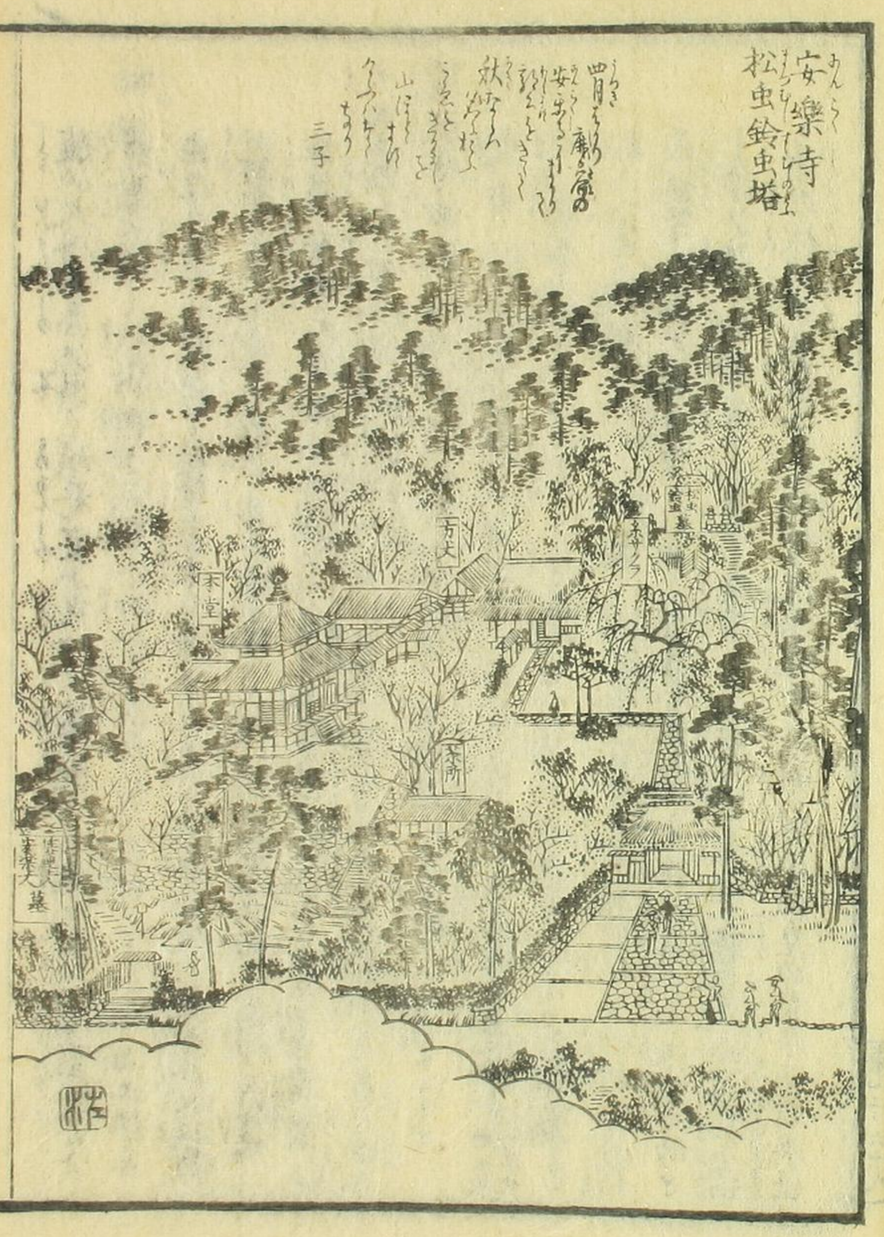
阿育王塔 門の東傍にあり高凡四間半許の石塔婆之沙門真亮建立なり
當寺ハ往昔法然上人の徒弟住蓮坊此所に住し法然上人も亦暫く栖ま
せ給ひしが中絶し良久く廢せしを延寶八年知恩院三十八世萬無心阿上人
これを再興し新に經藏を造立し倭摺の一切經を寄附し寺號萬無寺と号
實此地ハ松風蕭然として平生に鉦の音絶ず六時禮讃の聲ハ幽谷に響し
寂寞として峯の月朗なり廬山の白蓮社とも云へらるゝ清淨無塵の佛界
なり世に六字の念佛を麗々合流とゝなへハ此寺の称名を習へるなりとぞ

住蓮山安樂寺 法然院の南にあり寺境すべて閑雅にして塵を除き堂前に糸桜の大樹あり近年枯る

本堂 南向 阿弥陀佛 座像 僧都の作 脇士觀音勢至 共に運慶の作

松虫 鈴虫両尾像 檀 安阿弥作 座像一尺許 同 両尾之塔 堂前東の山の方にあり 五輪の小石塔婆二基列ぶ

當寺ハ往昔靈鑑寺の東上る事六町ばかり右の方に有て法然上人如法
念佛執行の所なり徒弟住蓮安樂の二僧に附屬し給ふ後鳥羽院の
愛妃松虫鈴虫の二婦一向專修の勸めを信敬し發心して住蓮安樂等に



隨ひ大内を忍び出て此菴室に来て薙髪して尼と称す 上皇これと
逆鱗あり二人の僧を死罪に行ひ亦其師たる法然上人を南海土佐に
左遷し給ふ依て此菴室永く廃せりを遠江星霜を経て後念仏弘法の
旧跡なりとて寺院を建営す 今の地に移して住蓮安樂の二師を開山とする也

住蓮安樂二師塔 日村の西の傍にあり五輪の石塔婆二基列び住蓮安樂の両僧へ

大豊明神社 日村の西にあり去生土神と祭神牛頭天王なり 右神社の辺方四町今田地と大豊明神八幡宮の鎮守なりとぞ
憲仁の乱後和州忍辱山に移り此田地の山上を椿ヶ峯と称す 例祭九月九日神輿一基殿数本あり

圓城寺旧趾

富寺八幡宮右大臣藤原朝臣氏宗卿の終焉の地なり 尚侍藤原淑子贈太政大臣長
良女病苦に悩まし一夏有て益信僧正を請て祈禱せしむ霊験速かにして
程ふ淑子師檀となつて發願し山荘東山椿峯西麓の家を佛刹とし益信
を住せしむ即ち圓成寺これなり又寛平太上法皇益信僧正と灌頂の師と
給ひ殊に御願有て伽藍を興隆し小寶塔を作起し聽衆立義亦具に備
る歴代編年集成に見えたり院家記云真寂寛平法皇の皇子俗諱齊世

親王法三親王と号す又圓成寺宮と申す云々 如此圓成寺又城と作る
左經記云寛仁四年六月十六日丙申 故一條院御骨為避方忌年来奉置圓
成寺而依方開圓融寺遣今日奉渡

霊鑑寺 日村谷口の左より禅宗開基霊鑑院尼公 後水尾帝の皇女なり則ち 前中納言基長
本堂 南向 不動明王 立像一尺六寸 慈覚大師作 鎮守天満宮 寺境の東にあり
雍州府志云霊鑑寺園城山と号す後陽成院の女房持明院基久卿の
息女妙法院宮尭然法親王を産す後陽成院崩御後尼となる此所如
法院宮領地なるに依て寺を建てこれに捧ぐ後西院の姫宮第子と為す
谷の宮と称す幾無くして遷化す 今の住を千宮と称す是も亦新院の姫宮也

神護寺旧蹟 日村の南にあり今其地田圃の中と
永享日録云永享七年十二月廿日神護寺御成御点心被進上云々

二水記云大永七年十月十三日今日御出張云々道永細川高国入道午時上洛東山神護寺ニ著ク此後大樹御上洛御陣所若王子云云

又云享祿四年正月廿一日京勢吉田ニ打出ル在家少々放火也東山法勝寺神護寺等同焼失ル云々

律家の古所なるを惜むべし

如意寺　霊鑑寺の南谷と隔て隣りあり如意嶽楼門滝のかなたに有り諸堂出現々々なり開基は智證大師此山を巡覧大師の霊像現れ給ひ一ツの庵現れ給ひ観世音の霊像現れ給ひ大師ちかく歓喜給ひ荒廃の地となり霊鑑寺

大師の壇を築き岩窟に観世音の世に減亡し久しく荒廃の地となり霊鑑寺

當寺の本尊なり然るに乱逆の世に減亡し久しく荒廃の地となり霊鑑寺

居公の所なり田地の樹今の所ニ堂と云

當時本尊ケケハネ動明王ケ回の本尊ハ三井寺の別院ニ有ル

霊木杉　本堂の後ニ有り希代の鹿宮杉の傷ニ閼伽井　日所ニ有ル寒暑増減ケ

大木ニ有ル

古蹟　右同所ニ九右門ケ上ニ有ル山州名跡志云如意寺ハ園城寺の別院なり

當寺の本尊如意輪観世音ハ今三井寺の南院の内観音堂の本尊ニ有ル

三井寺如意寺記云如意寺ハ長等山最高き所峯ニ如意寶山と号ス

又正當山と号ス此峯正ニ王城の東門ニ當るを以て名く東三井の上ニ

西洛東鹿谷ニ至る高峰一帯行程凡二十里南垂藤尾ニ止る北方小峰

陳列志賀山ニ接く其間堂舎僧房鱗次相列る又云三階楼門ニ入

園城寺西門ニ入ル左右廻廊門の南ニ瀑あり仍て楼門の瀑布と云

坂下一里ニ有る鹿谷惣門ニ至る左右ニ垣を築く云云

山州名跡志云関白太政大臣基忠公の子大僧正道珍當山住職也是則

三井長吏南瀧院也と云々又保胤入道寂心陰陽師賀茂忠行ノ子慶滋の保胤と改む発心

出家の後内記居住ス参河入道寂照寂心を以て師とし同く此寺ニ住ス保胤

上人と云

入道寂心長徳三年東山如意輪寺ニ終と續本朝往生傳ニ見えたり

真如堂縁起云向阿上人本ハ園城寺の住侶浄華坊證賢と云無双の碩

學なり然るニ弘安十年行年廿三ニ発心離山して如意寺の大門の柱ニ書付る

ひとりなる命のあるかぎりかくるのよ墨そめの袖　向阿上人

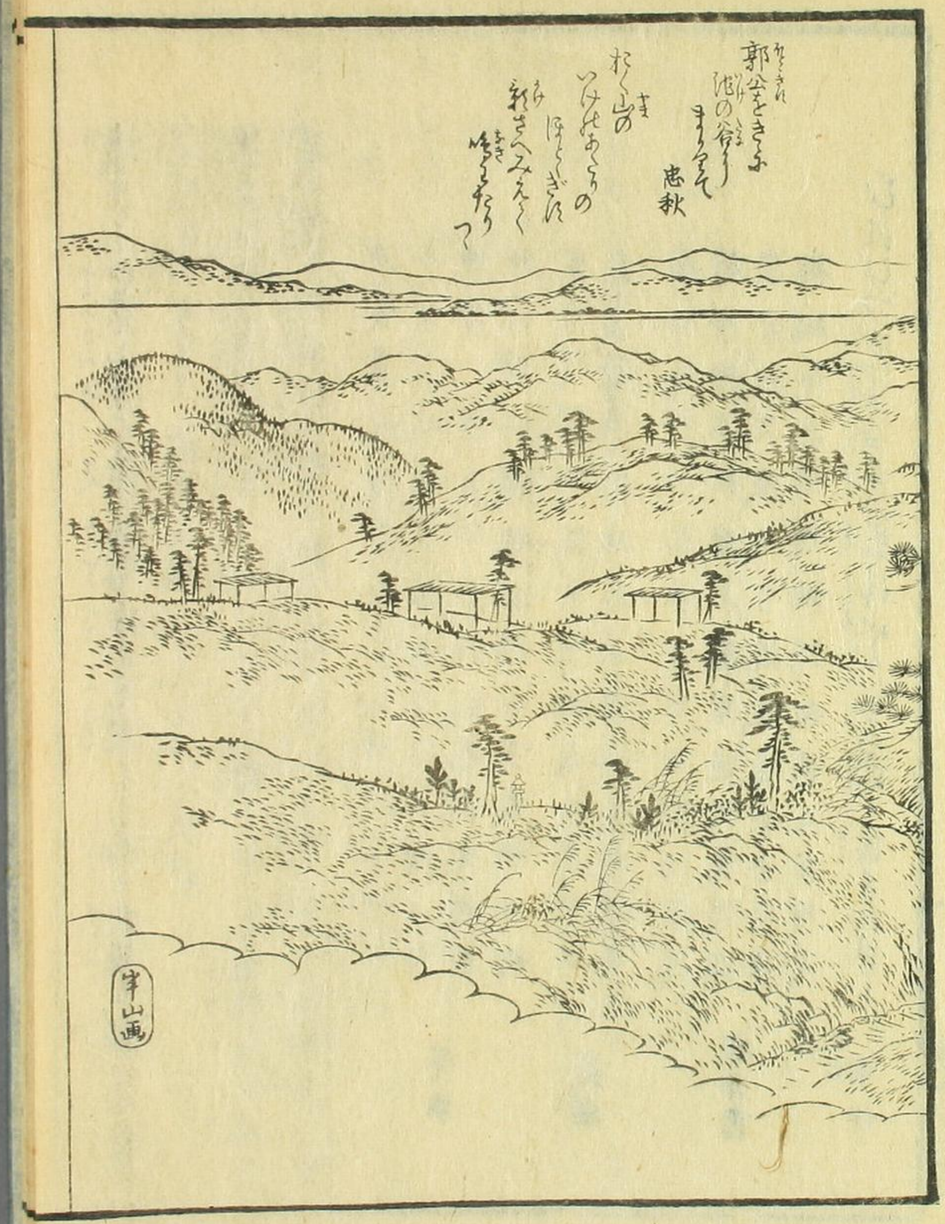
鹿谷　日山中の名中に禁ニ鹿谷村あり名義詳ならず按ずるニ如意寺の縁起ニ乗の出

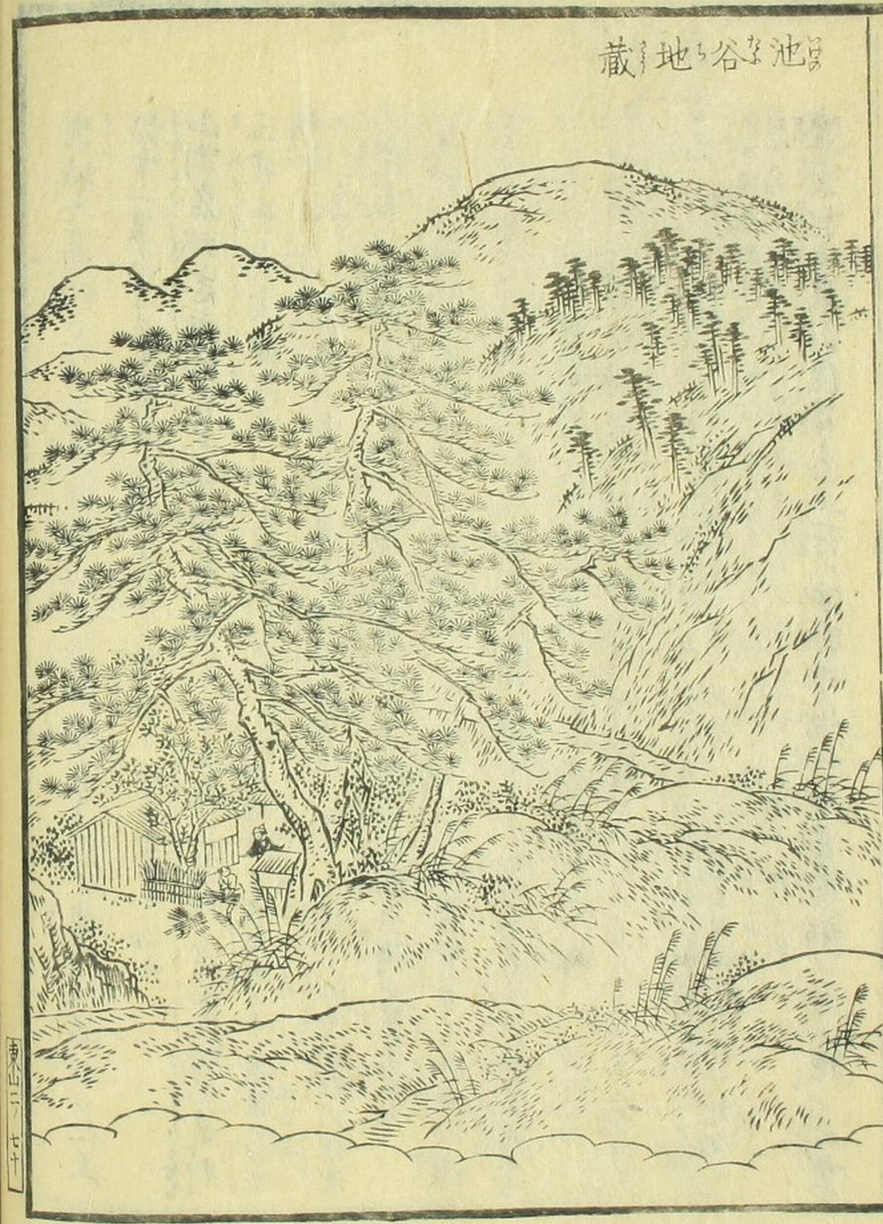
談合谷　古日所ニ康谷村ニ十餘町東ニ上る所奇石怪岩峙ち眺望絶景なり往昔

平判官康頼丹波少将成経平家を謀ル所ニ法勝寺の執行俊寛の山荘ニ遊宴ニ事ニ託し密謀を企て

或云是安祥寺の上の堂の跡ニ壇の名ニ謀を企て談合谷と云

盛衰記云東山鹿谷ニ一所ハ法勝寺執行俊寛僧都が領也後三井寺ニ


郭公をきく
池の谷
忠秋
おく山の
ひとけあくらの
ほとゝぎす
新さへみえく
なきそらかな
半山画


池谷地蔵

續き〻如意山深く前は洛陽遥に見渡し〻而も在家を隔なり爰ぞ
究竟の所なりと〻く城郭を構へ兵杖を用意せ云々
平家物語云東山鹿谷と云所は三井寺に續き〻き城郭にてぞ有る
甚に俊寛僧都の山荘あり彼所に常は寄合く平家を亡ぼさん計略を巡らす

法勝靈區倚翠微寛公謀國事空非
千年寶位長無恙萬里投荒獨不歸　芥煥
蛻骨一肇童子手鮫珠幾瀉老僧衣
祇今談合猶留谷精舍重逢佛日輝
寛公別墅已泯然慷慨爲惟壽永年　巖桑
寂寞談溪風雨夜水聲添恨轉潺湲
帝命曾將付寵臣源平戰鬪迹俱陳
討疎絶漏獅溪上讀重遥投鬼界濱　釋淨壽
寂寞池園虛日月焜煌臺殿委灰塵
徘徊寧忍傷情地恨殺前人哀後人　尾古重伴

ひとびとつゝが谷の岩清水ながれ遠く流るゝ

俊寛の面影忘るゝ事なし　美乃　荆口
夜やあけん　参河　木梁
岩ゆるやなぎ　丹波　其陌

樓門瀧　談合谷の上にあり前に云如意寺の樓門なりと有しを此に斯は名づくるか
一名如意の滝も云
宣胤卿記云文亀二年五月六日真如堂に泰請次に如意嶽に登り瀧及び湖水を見る
龍王祠　同所如意寺の伽藍より乾の方二町許に有り是より三井寺に至る行程二十町
許り彼寺の講堂の前に出る
葵谷　龍王廟の東にあり此所山城近江の
国境なり
千石巖　葵谷の左三町許にあり岩の形高く〻〻俵物千石を積上し如くなり〻〻
池地藏　同所の西にあり山中に地藏尊の小堂あり此所は時鳥を聞の名所なり洛下の雅客
初夏の頃より五月に〻て杜鵑の音を聞く楽む者多し
中尾山城蹟　義晴公こゝに移らんと欲し在営いまだ成に及ばず半途にして遂に東坂本に太夫に夢に
浄土寺村の上にあり城山と云ふ此を中尾と云ふ今尚其址存せり
前に銀閣寺万松院の塔の傍下より城山に登る
再魯に曰年三好長慶放火しくられを亡ぼす今尚其址存せり
究太記云天文十八年十月廿八日先慈照寺の大嶽中尾と云山に城を鍬えぬ
はせられ〻同十九年二月十六日又御普請えぬ程なく造り出せり此城山

高〳〵一片の白雲嶺を埋み谷深〳〵万仞の青岩路を塞へざれり九折なる道をめぐり〳〵登る支七八町南ハ如意嶽ふ續き尾嶺と三重ふ堀切く二重壁を付く其間ふ石を入れり構丹と目の下ふ見おろし誠ふ見事ふ作出せり云々

如意嶽 鹿谷の東ふある峯ふ三井寺ふいたる行程二里ふ佛ふ此山を大文字山と云

山城志云如意嶽ハ鹿谷村の上方丹嶂空ふ聳へ兀立嶮絶ふ山中ふ寺跡多〳〵佛堂僧舍千宇幾ふ今盡く廃ると云々

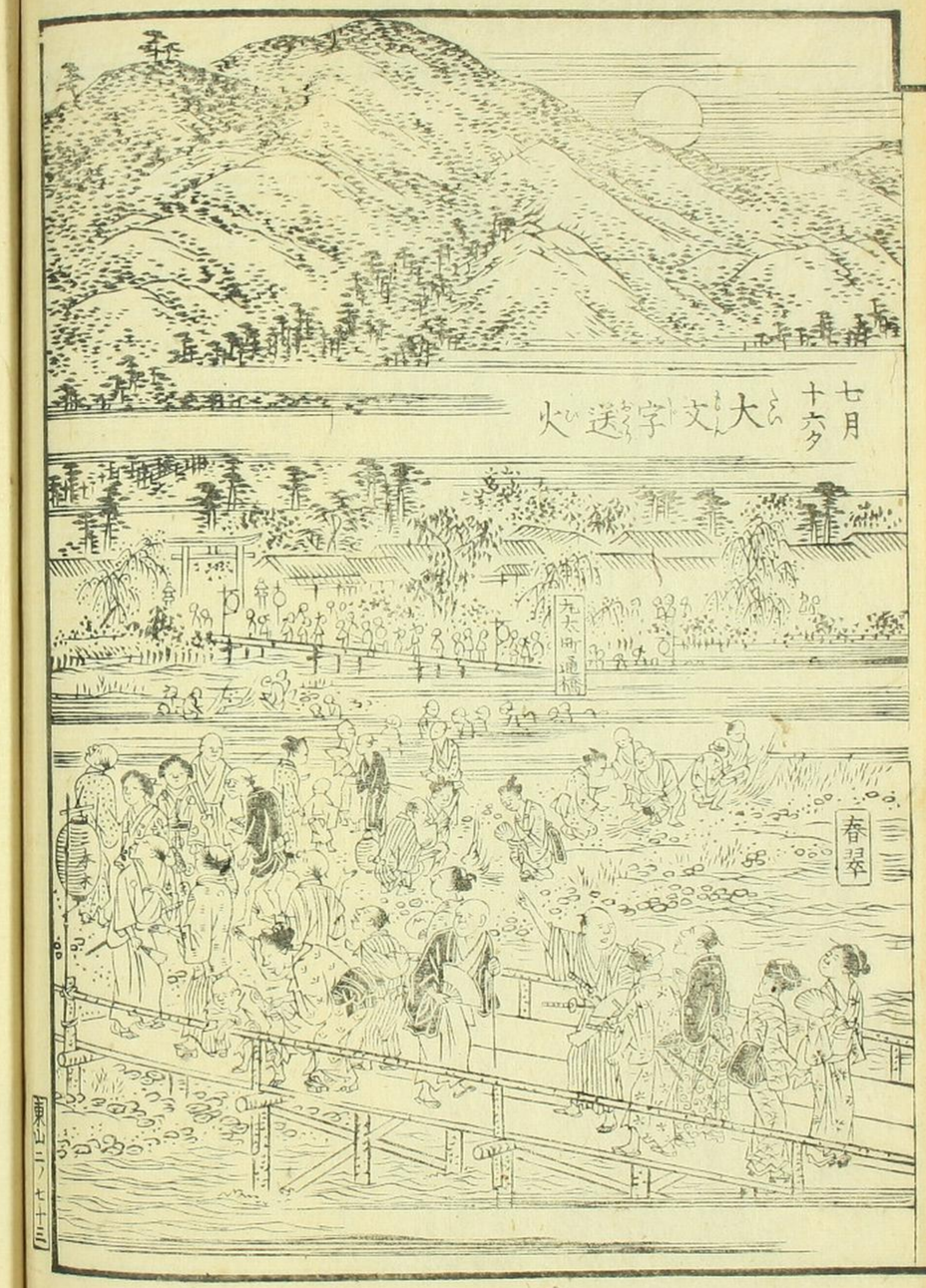
諸社根元記云平安の帝都ハ天上の名跡を顕ふせる國なり東ふ當つく如意嶽あり日神岩戸を出させ給ひく其御光顕れ出たりる城ハ百万神忱び〳〵皆意の如くなりと宣ひしよりう如意山と名付く云々

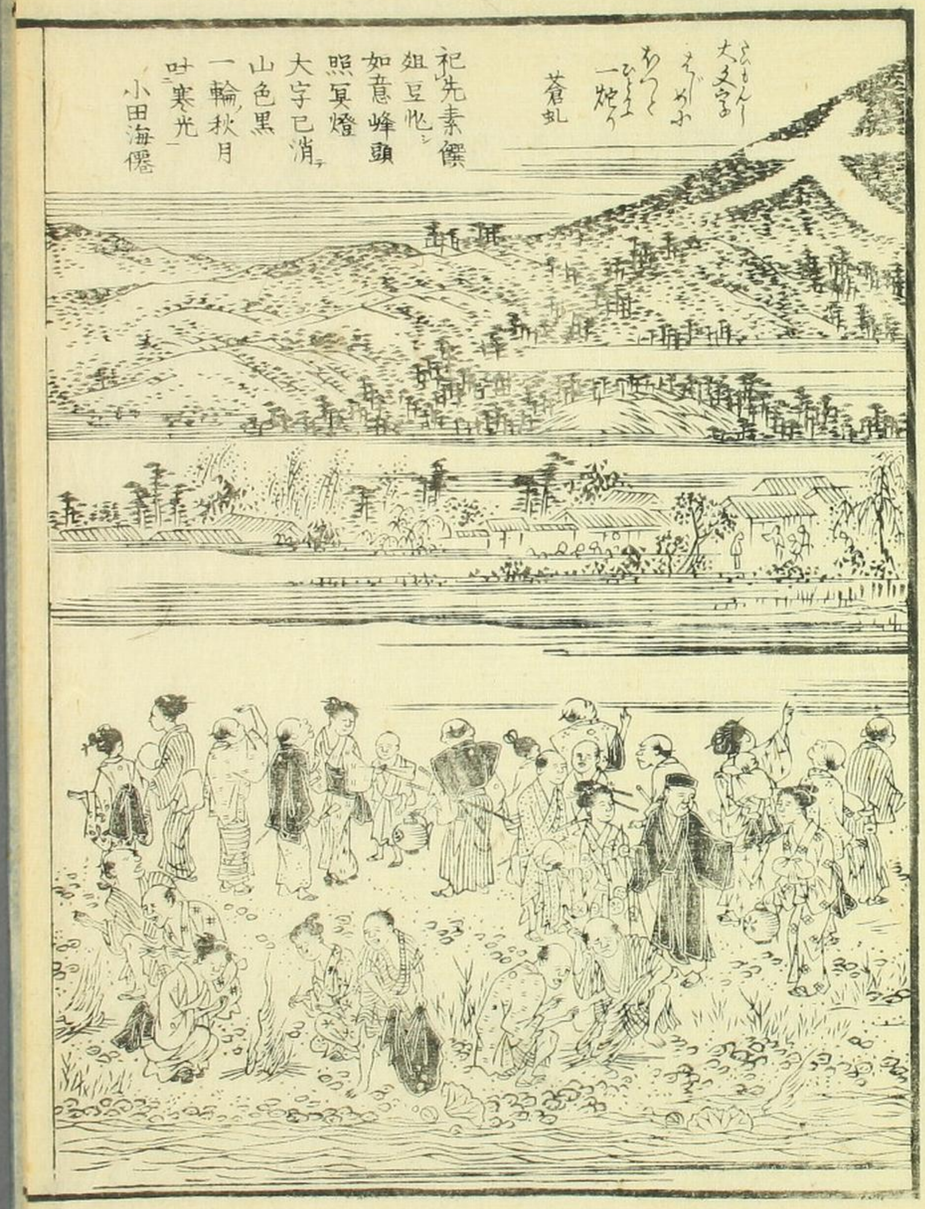
本朝神仙傳云慈覚大師其入滅の期ふ及ん〳〵忽然〳〵失ぬ所在を知ひ門弟相待拝を如意山の谷ふ落其餘を見ひ云々

異本應仁記云文明元年五月多賀豊後守高忠如意嶽ふ陣し江州ふ通ひ云々斯くハ鷺杜の通路留るべしと云々

毎年七月十六日の夕方京師の山中〳〵送火を焼支數あり就中此山の大文字の形勢道壮その地ハ高嶽ふあ〳〵連珠の如く粲然〳〵明ふ赫然〳〵赤〳〵他の火ふ比ぶれば大ふ勝れり土人傳へ〳〵往昔此禁ふ浄土寺といへる天台の伽藍あり本尊阿弥陀佛一ッせ回禄の時此峯ふ飛去ッ光明を放ちり山是を慕ひ〳〵本尊を元の地へ安置し夫より千蘭盆會ふ光明のかゝりを作ッ火を燈しる尓後弘法大師大文字ふ改めり屋霜累ッく文字の跡も壓れ〳〵慈照院義政公相國寺の横川和尚ふ命ぜられ元の如くふ作らしめり云云 山州名跡志云相国寺横川和尚と將軍の臣芳賀掃部と西人作る所之掃部ハ和尚事道の分子なり火の数七十二ありと云々

雍州府志云毎年七月六日慈照寺浄土寺西村の民山ふ登ッ松木を伐ること長さ二三尺許家ふ飯〳〵細ふ割日ふ乾し同十六日の晩ふ至ッく各此薪を携へ〳〵山上ふ登ッ山の西北の面ふ大の字の跡あり是弘法大師の畫る所なり所々ふ小石を以く徴〳〵各合〳〵之を視る時ハ則字畫分明なり凡大の一字横の一畫其長さ四十間ふ及ふ其間炬火十三箇余なり


七月十六夕
大文字送火
五大町通橋
春翠
東山二ノ七十三


大文字の
ともしび
一炬
蒼虬
祀先素饌
俎豆化
如意峰頭
照冥燈
大字已消
山色黒
一輪秋月
吐寒光
小田海僊

左竪の一畫八十間餘其間炬火三十箇右一畫六十八間其間二十九箇
余なり携へ来る所の薪水前ふ所謂微々たる所の小石の上ふ積置き同
時ふ火と點ぜ其光々明赫奕たり之を亡魂の送火と云洛下衆人爭て之を観る云々
伊藤東涯七月十六日火を観るの詩ふ云青山爲紙火爲墨點々綴成象
物形日暮峯頭何所似却疑字舞列唐廷紹述自注ふ云京俗中元の文集
後一日城東北諸山炬を燃し或ハ火坑を穿ち點々相連て物形の文字を
爲し因て想ふふ唐世云々ふ字舞と云ふ者舞人若干地ふ亜く大平萬
歳等の字を成し想ふて亦此の如し故ふ三四之ふ及ぶと云々冬の日雪の朝
此文字の跡ふ雪積て洛陽の眺となる是を雪の大文字といへり
大文字噺熊谷直藤云毎年七月十六日の黄昏ふ洛東浄土寺村如意嶽の山上ふ燈し
たる大文字ハ弘法大師の作なりと云傳へたりつゝふ也甚巧字勢の妙絶たり
数ひ見て予彼村ふ往て親しく村長ふ問ふ第一の畫長サ三十八間第二ハ拾五間第三拾
間ハ火の数七拾五其中央の所をカナワと云ふ山ふ登て薪を積て火勢を助る其体さながら護
生松の小剡を以て柵此の如く積て火勢を助る其体さながら護
摩炉ふ用る壇木助刀ふ異なる思へ山上ふ用ゆる柴炉護摩の根原なる灵地なり
良炳然たりまたの七拾五の火場皆穴よりて唯平地なれども絶て草木を生ぜ
故ふ焚時諸出殺生の患ひなし又冬日の雪朝なる雪の大文字を顯さしむる人目を

驚敬せしむる大師秘密の加持力を以て山祇ふ誓ひ後葉まで結界なしむふ
なるべきふ忌服ある人を甚く憚る人家ふ湯く用ゆれば忽ち祟りを受
るなり千歳の今ふ顯然たるハ神秘の密法を下民ふ示しなるべしかゝる諸病者
此大文字を拜して諸願ふ顕然たるハ平愈を得し人多し想ふに七月十六夜ハ
亡灵の送火なり諸願ふ炉火を爇て以義経流ると所見なり猶素其由緒と
知らんまく二月元旦ハ年月日時皆陽數なり當夜ハ則其裏なり黒年黒月黒日
黒刻ふ悉く陰數なり故ふ憎盃の柴燈護摩を焚て諸悪気消亡ず退散
せしめ天下太平国土安穏の祈祷をなし置ふ思ふに此夜又北山ふ船形と
焚火ハ則異船焼ふの表示ふ蒙古異賊を調伏の護摩炉なる良蹟なるべ
し或書ふ曰延暦年中例歳三月南谷灵鑑寺の峯ふ北辰を祭て伐木
山川の神々ふ捧て之を御燈と云ふ異形老弟の例を模しなりと云ふ燈遠拝
のこゝハ書経舜典ふ見えたれども彼国ふハ古昔亡ひ皇国ふハ今ふ迄絶ての例なる
皮ふあらずや斯く思ハ村人カナワと云ふ所ハ以薪炉ふ用ひ鉄輪の旧地なる
て其ハ往昔弘仁中天下飢饉疫病流行せし皮ふ大師其頃より以鉄輪
を中央ふ置て上下左右ふ七拾五の火を焚て大の文字を作り改め月も七月十六夜ふ
なり上ハ天地陰陽の妙義を取て玉燭安穏宝祚悠久と祈らせり山其と
村人の勤め来しなるべし其中ハ相當の下行を賜なりしかども数百年来世の乱れ
ふ漏き其事絶えそしなり其中ハ坎助力をこそあらめ年々薪の助力を
なせり同志の人ハ野ふくも坎助力をこそあらめ年々薪の助力を
の山ふ燈火なる妙法の二字是ハ日像上人大文字と殿ひく作りなること必せりさる
を大文字ハ足利將軍家の時ふ始りとなる説ハ金閣寺山なる尤大字の良久
其を籠島の郡名不図會ふ銀閣寺の所ふ出せるハ甚く誤なり坎如意嶽の大文
字ハ弘法大師の御作なること其筆法点畫の微妙なる何者なるぞ
実ふ千歳の今ふ炳然たる拝見しなるべきなり予深く貴ひかこんぬ
あまり聊言を述るふなん

詠東山大文火

何人巧思畫山成村炬秋輸一夕明
巨筆飛丹光的歷積薪焚翠勢崢嶸
烟含遠影浮鳧水雲伴昏星落鳳城
清賞由來片時散空餘孤月照三更

皆川愿

七月既望天氣清綠鴨河邊日未生
東山一片消雲霧爽爽秋樹帶夕晴
西岸樓臺十二欄置酒有待正整歡
南北板橋人如織風飄綺羅起彩瀾
彩瀾漫漫淺水濱藝麻沈瓜粹祝頻
知是盂蘭盆會罷攜來行典餞送神
忽有一炬登翠屏如意嶽面烟吐青
依微火色旦隱見恍疑曉天橫參星
塡坑柴薪發光明斯須滿山輝熒熒
熒熒一百單三點三畫橫斜大字成
游賞萬人相追隨百里遙望絫離離
豈啻書聖入石妙更驚高僧彌天奇
一時摸倣勢靡然競賈餘勇正煽煽
西山慈航北妙法看同兒孫侍滕前

巖垣彥明

韓國倉樹肆騎奮赤壁明月遂光華
韓國赤礎何足道海內奇觀獨堪誇
君不見室町幕府全盛年城北梵宇
駭聳天車馬雲簇寶池畔微風香動
萬朶蓮東山炎文照映時將軍倚欄
興熙熙豪華秖今成夢境二百餘年
韻事遺

紫石軒記云

如意ヶ嶽少くこの山づみのむかしやうせんん相國寺の
大とうの文字一つを谷峯ちひく筆をらせふんのうを
の表ふ宮を揚く宮も業屋もあまき望まーむち
世れ日はうー草ちき岩舎花園加茂山ふつきく見ち
流ーれい光宮ふ宮ふかーらを突ちくちをにちれ
あちうの山をちを九室のちの人の御垣なーてむ羅ー大宮つ
ちをまををき國原ちうー田の在つきちけ
うの座ちせの物ふ林の中ちをうびへ出ー毫ちたが為ふ
ちを造ちを人狀見ちれおちちちつふーちのにーこちれ
つをふ人のをーへーふ
露雫のあなふれば山路の深へつをも踏ちなうを室

無腸居士

如意が岳の火大文字を名に
ふみなされ焼し代もあるを東山名に
山の惜しと雪にも見ばや大文字　雪臣
薄雪や大の字かけて草　嵐雪
大文字の火より郭もあきのこの　其角
梅白ぎれや先うれる山の大文字　蒼虬
大文字やあるの雪も嘆ぎうるね　梅室
　　蕪村

東山名勝圖會巻之貳　終

早稲田大学図書館
011688995894